石川県埋蔵文化財情報

第　44　号

巻頭図版（古府シマ遺跡　一針Ｃ遺跡　弓波コマダラヒモン遺跡）

令和２年度上半期の発掘調査から …… 部長　川畑　誠 …（1）

発掘調査略報

西任田遺跡、中ノ庄遺跡（能美市）……（3）

松梨遺跡（小松市）……（5）

古府シマ遺跡（小松市）……（6）

一針Ｃ遺跡（小松市）……（10）

島遺跡（小松市）……（12）

梶井衛生センター遺跡（加賀市）……（13）

弓波遺跡（加賀市）……（14）

弓波コマダラヒモン遺跡（加賀市）……（15）

令和２年度上半期の出土品整理作業 ……（19）

調査研究報告

加茂遺跡南大溝地区に関する覚書　―主要遺構の整理に向けて― …… 川畑　誠 …（22）

八日市地方遺跡の無文土器系土器について …… 山崎頼人・林　大智 …（36）

小島西遺跡出土の鳥類遺体について …… 江田真毅・山川史子 …（46）

2021年3月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

古府シマ遺跡

調査区俯瞰（上空から・上が北）

右上の森は石部神社の社叢（丘陵斜面）。調査区は、社地の西裾を南北に限る農道（鉄板敷）の西側が３区、東側が４区である。３区は前年度調査（第１面）の継続で下層部（第２面・第３面・第４面）を調査した。４－１区、４－３区は今年度新規調査区である。

３区第２面遺構掘削状況（北から）

前年度からの継続である３区（３－４区）では、第１面の下位 20 ～ 50cm 付近で平安時代後期～末期頃の遺構・遺物を多数検出した。

調査区俯瞰（上空から、上が北）

３区第２面遺構掘削状況（北から）

写真解説

古府シマ遺跡

３区第３面遺構検出状況（北から）

第２面下 20cm 前後で幅 20 ～ 30cm 程度の畝間溝に酷似した細溝群を検出した。２条以上が並行して延びる状況を確認した。性格は明らかではないが、古代末期に遺構が密集して営まれる前の当地の状況を垣間見せる。

３区第４面遺物出土状況

丘陵裾部の沢状地で土器群を確認し、第４面として発掘調査を実施した。須恵器類（数点の墨書土器を含む）は９世紀末～ 10 世紀初め頃の所産とみられる。当該期の遺構は本遺跡の一連の調査では確認されていないが、周辺での遺構造営の開始時期を示唆するものであろう。

3区第3面遺構検出状況（北から）

3区第4面遺物出土状況

写真解説

一針C遺跡

調査地遠景（L・M・N区下面）（西から）

一針C遺跡は、小松市北部を流れる梯川の中流域右岸に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。平成25年度から、梯川河川改修事業に伴う発掘調査を行っている。平成30年度からは改修前堤防の下を対象に調査を実施している。

令和２年度の春期調査では、昨年度より着手したL・M区の下面・最下面およびN区の上～下面を調査した。秋調査では、N区最下面およびO区の上～最下面を調査した。

周溝を持つ平地建物全景（L・M区下面）（南東から）

L・M区下面では、弥生時代後期の掘立柱建物や周溝を持つ平地建物などの遺構を検出した。弥生時代後期後半頃とみられる平地建物の外周溝は、内側の周溝で直径約11ｍを測り、部分的に３重で検出している。同じ場所での建て替えが複数回行われていた状況は、周囲の過年度調査とも共通する。また、掘立柱建物の柱穴底には、礎板を持つものもみられた。

調査地遠景（L・M・N区下面）（西から）

周溝を持つ平地建物全景（L・M区下面）（南東から）

写真解説

弓波コマダラヒモン遺跡

赤色漆彩文容器（あかいろうるしさいもんようき）

口径17.8㎝、残存高9.2㎝を測る双耳付き円筒形容器であり、口縁部下と胴部に２条の突帯を持つ。外面の黒漆地に赤色漆で１条の横位列点文と太さの異なる横位細線を廻らし、耳下には花弁様の文様も見える。樹種はトチノキである。

（詳細は17頁参照）

赤色漆彩文容器

赤色漆彩文容器展開写真

令和2年度上半期の発掘調査から

部長　川畑　誠

令和２年度は、石川県教育委員会から11件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省４件、鉄道・運輸機構７件を数え、いずれも加賀地方に所在する。本号においては、主に上半期に発掘調査を実施した８遺跡の概要を紹介する。

一針Ｃ遺跡（小松市）は、梯川河川改修に係り、主に４～６月に実施した調査（1,100㎡）を紹介する。本遺跡は、梯川中流域右岸に位置する弥生時代～中世の集落遺跡で、河川による土壌堆積と集落形成・廃絶が累積、調査面は最大４面を数える。調査は、平成25年度（2013）に着手、今年度は第７次調査にあたる。最下面・下面で弥生時代中期後半の環濠、弥生時代中期～後期後半の平地建物、掘立柱建物、弥生時代後期～古墳時代の自然流路等を、また中・上面で奈良時代～室町時代の掘立柱建物や溝を確認している。なお、10～１月の調査概要は、次号に掲載する予定である。

古府シマ遺跡（小松市）は、梯川中流域右岸の丘陵裾に位置する平安時代～中世の集落遺跡で、今年度（第３次調査）が最終年度となる。調査着手時から、加賀国府に関連する遺跡と推定されており、今年度の調査で、その変遷過程がほぼ明らかとなった。本遺跡は、９世紀末頃に始まり、出土遺物には「長」「厨」墨書土器が含まれる。その後、11世紀代に盛土を伴う造成後、建物域が形成される。稠密な密度で分布する建物柱穴、井戸や、大量に出土した土師器、陶磁器は、これまでの梯川中流域の調査例と質的に大きく異なる。隣接する石部神社境内（南野台遺跡）では、小松市教育委員会が確認調査を継続中であり、その成果とあわせて、今後の本遺跡の位置付けに大いに期待したい。

鉄道・運輸機構の調査は、北陸新幹線本線（平成28・29年度（2016･17）調査）に付帯する取付道路敷きなどを対象とする。いずれの調査でも、本線調査区から連続する遺構を確認している。

西任田遺跡（能美市）では、平安時代末～鎌倉時代の集落を調査し、井戸から漆器、下駄などが出土した。隣接する中ノ江遺跡（能美市･小松市）では、弥生時代、平安時代～鎌倉時代の集落を調査し、平安時代前期の井戸などを検出した。松梨遺跡（小松市）は古墳時代～中世の集落遺跡であり、今回の調査では中世の屋敷地を区画する溝や畝溝群を検出した他、奈良・平安時代の遺物が出土した。月津台地に立地する島遺跡（小松市）は古墳時代後期、奈良・平安時代、中世の集落遺跡であり、今回の調査では古墳時代後期の掘立柱建物、奈良・平安時代の掘立柱建物、区画溝などを検出した。

梶井衛生センター遺跡（加賀市）は、弥生時代～中世の集落遺跡であり、今回の調査では弥生時代後期の溝、土坑や、平安時代の掘立柱建物柱、井戸などを検出した。井戸は、小石を敷き詰め、「泉」と記された墨書土器が出土している。弓波遺跡（加賀市）は、弥生時代～中世の集落遺跡である。平成28年度調査では、弥生時代の平地建物、方形周溝墓群、古墳時代の居館、古墳などを確認、各時代とも注目すべき成果を得ている。今回の調査では、古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物などを検出した。弓波コマダラヒモン遺跡（加賀市）は、弥生時代～中世の集落遺跡であり、今回の調査では弥生～中世の溝、土坑などを検出した。Ｄ区大溝からは、弥生時代後期後半～終末の赤色漆彩文容器が出土した。この容器は、その文様構成などで全国的にも注目すべき成果といえよう。

北陸新幹線（敦賀延伸）に係る調査は、平成25年度に始まり、今年度で全調査を完了した。一連の調査は12遺跡、調査面積97,890㎡を対象とし、ピークの平成28年度には８遺跡、71,030㎡の調査を実施した。今後とも、計画的に整理、報告書刊行を進め、調査成果を地域史に還元していきたい。

令和２年度 発掘調査位置図

令和２年度発掘調査遺跡一覧

№	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	時代	関係機関	関係事業
1		庄（しょう）・西島遺跡	加賀市庄町他	4,860	縄文～中世	国土交通省	一般国道8号改築（加賀拡幅）
2		観法寺（かんぽうじ）ヤッタ遺跡	金沢市観法寺町	4,430	平安～中世		一般国道159号改築（金沢東部環状道路）
3	○	一針（ひとはり）C遺跡	小松市一針町	3,120	弥生～中世		梯川河川改修
4	○	古府（こふ）シマ遺跡	小松市古府町	2,405	平安～中世		＊
5	○	西任田遺跡、中ノ江（なかのえ）遺跡	能美市西任田町、中江町	1,150	弥生～中世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
6		中ノ江（なかのえ）遺跡	能美市中ノ江町、小松市軽川町	3,050	弥生～中世		＊
7	○	松梨（まつなし）遺跡	小松市松梨町	330	弥生～近世		＊
8	○	高（たか）遺跡	小松市高町	290	古墳～中世		＊
9	○	梶井衛生センター遺跡	加賀市梶井町	150	弥生～平安		＊
10	○	弓波（ゆなみ）遺跡	加賀市弓波町	370	弥生～中世		＊
11	○	弓波（ゆなみ）コマダラヒモン遺跡	加賀市弓波町・竹見町	700	弥生～中世		＊
	8件	11件		20,855			

西任田遺跡、中ノ庄遺跡

所 在 地　能美市西任田町、中庄町地内　　調査期間　令和２年４月20日～令和２年６月25日
調査面積　1,150㎡　　調査担当　熊谷葉月、寳珍貴史

調査位置図（S=25,000）

西任田遺跡、中ノ庄遺跡は能美市北部、手取扇状地扇端部に立地している。北陸新幹線建設に伴い、平成28年度に本線部分の全長約900m、面積11,340㎡、令和元年度には、取付道路部分について西任田遺跡1,460㎡の調査が実施され、主に弥生時代の平地建物や平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物群を中心とした集落跡を確認している。今回も取付道路工事にかかり、平成28年度５・２・１区の東側に隣接した1,150㎡について調査を実施した。

西任田遺跡（５a 区）では、平安時代末～鎌倉時代の総柱の掘立柱建物、井戸、区画溝などを検出した。建物柱穴や区画溝は過年度調査の続きとなる。井戸から漆器片や下駄などが出土した。

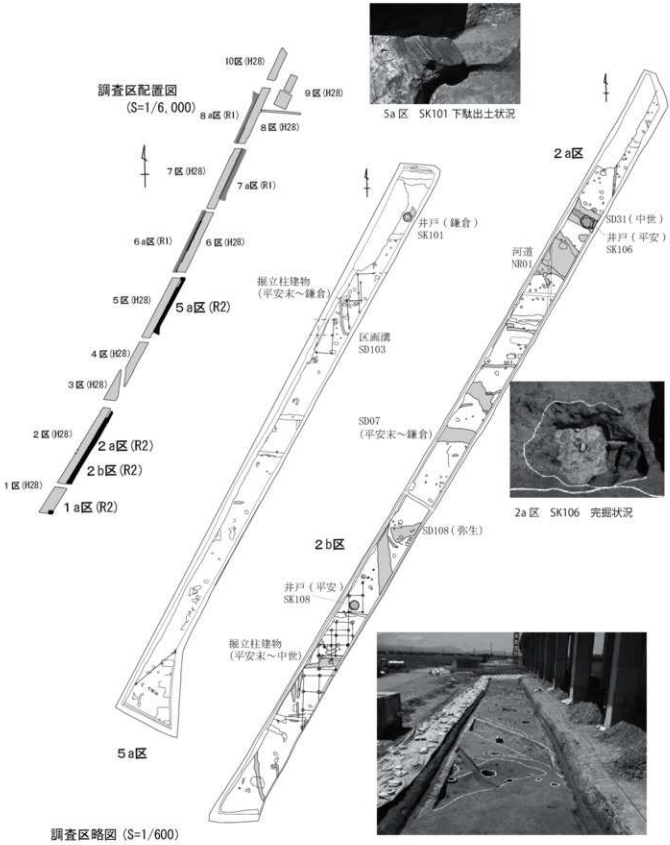
中ノ庄遺跡（2a、2b、1a 区）では、掘立柱建物、井戸、河道跡、区画溝、土坑等を検出した。2b 区の弥生時代の溝は上面の炭化物層から弥生時代中期の土器片が出土した。2a 区の河道跡は古墳時代、奈良・平安時代の須恵器、土師器の小片が出土している。掘立柱建物は主に 2b 区中央に集中している。建替のほかは、区画溝を伴うなど５区と同様の状況が見られる。井戸は２基を検出した。2a 区の井戸は隅柱と板材の痕跡から縦板組とみられる。2b 区の井戸からは平安時代前期の須恵器坏が出土した。

古代末から中世にかけて、両遺跡は区画溝を伴う建物群と水田や空閑地で構成される似た様相の集落であったと考えられる。　（熊谷葉月）

5a 区　掘立柱建物と区画溝（東南から）

2b 区　掘立柱建物群（東から）

調査区全景（東から）



5a区　SK101 下駄出土状況

2a区　SK106　完掘状況

調査区略図 (S=1/600)

2b区　弥生時代の溝と平安時代の溝(南から)

松梨（まつなし）遺跡

所 在 地　小松市松梨町地内　　調査期間　令和２年８月26日～令和２年９月25日
調査面積　330㎡　　調査担当　白田義彦、奥座　普

遺跡位置図（S＝1/25,000）

松梨遺跡は梯川下流右岸の平野部に立地し、松梨町、蛭川町、犬丸町にまたがる東西約700ｍ、南北約650ｍの範囲に展開する集落遺跡である。平成３年に小松市教育委員会による調査が、平成28・29年度に北陸新幹線建設に伴う調査が実施され、古墳時代中期～後期、奈良～平安時代、中世の集落を確認した。縄文時代後期、弥生時代～古墳時代前期の遺物が散発的に出土した。

今回の調査は、北陸新幹線建設関連の取付道路工事に伴う調査で、平成28・29年度調査区に接する。調査区は４ヶ所に分かれ、Ｈ～Ｋ区と区割りし、調査区幅は広い所で約５ｍ程で、狭小な調査区が分散している。

Ｈ区では鎌倉～室町時代の複数の併走する溝を検出した。Ｈ区東側に接する前回調査区では、同時代の掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸などを検出しており、屋敷地を区画する溝と考えられる。前回調査では、２重の溝で屋敷地が区画されたと考えられており、それらの溝と繋がる可能性がある。Ｉ区では、併走する５条の中世以降の畝間溝群を検出した。前回調査でも同規模の畝間溝が検出されており、畠地の拡がりを確認した。Ｈ・Ｉ区の遺物は、鎌倉～室町時代のものが主体を占め、奈良～平安時代の須恵器が少量出土した。

新幹線建設に起因する調査では、奈良～平安時代の遺構は明確ではないが、比較的遺物が出土しているので、近くに集落が存在したと想定できよう。

（白田義彦）

Ｉ区完掘状況（北西から）

Ｉ区畝間溝群（北から）

古府シマ遺跡

所 在 地　小松市古府町地内
調査面積　2,405㎡

調査期間　令和２年５月１日～令和２年11月18日
調査担当　浜崎悟司　水田勝　小森康弘　山内花緒
　　寶珍貴史、畝麻由美

遺跡位置図（1/25,000）

調査成果の要点
・平安時代後期～末期の稠密な遺構を検出した。またその下層面から畝間溝状の細溝群を検出した。
・遺跡東端部が河川により浸食されていることが判明した。

古府シマ遺跡は県南部を流れる一級河川梯川が平地に至り蛇行を始める地点の右岸に位置する。

今年度は一連の発掘調査の最終年度にあたり、前年調査3-4区の下層部並びに東方上流側の４区の調査を行った。加えて堤防裾の線形変更により新たに工事区域に追加となる範囲（3-5区南、4-2区南）についても調査を行った。

3-4区は前年度に上層面（第１面、13世紀以降）の調査を実施したが、その際、一部の井戸を完掘しきっておらず下層面の基盤層の把握も不充分であった。今回下層面の調査に合わせて、上層面検出の未完掘井戸についても完掘した。井戸の壁面観察によれば丘陵裾部には沖積層があるのみで、洪積層はもっと下位または標高のより高い丘陵斜面寄りにあるものと推定された。

第２面では古代末の遺構・遺物を検出したが、丘陵裾の粘土層以外の基底面には遺物が包含されていた。そこでトレンチや井戸・土坑壁により第3面を認定し、丘陵裾部の幅５m程の沢状地について第４面とした。

第２面では11世紀～12世紀代の井戸、柱穴多数を検出した。素掘りのSK141は200本以上の箸、土師器埦皿類の完全品20点以上が出土したもので、上位から下位へ向かって順に土器類→箸→鮮青色の微細粒がそれぞれまとまりをもって廃棄されていた。微細粒について少し詳しく観察すれば、これらは一様に白い骨状組織様の微細物の縁辺に認められ、骨状組織が変化したもの（ビビアンナイト）のようにみられた。一連の流れを逆に辿れば、この土坑の埋没には大規模な饗宴の片付けを思わせるものがある。今後下層土の分析等を行い、廃棄の意味や背景を考えていきたい。

第3面では畝間溝状の並行する細溝群が検出された。溝は幅30cm程度、深さ20cm程度を測るもので、一般的な古代集落縁辺部に頻出する「畝溝」と比べて、掘削長はやや長めであるが、他は酷似しているようにみえる。第２面までとは打って変わって第3面では遺物が非常に乏しく、得られた少量の遺物も上位面遺構の掘り残しが疑われる部分からの出土であり、細溝に伴う遺物と認定できるものはない状況であった。

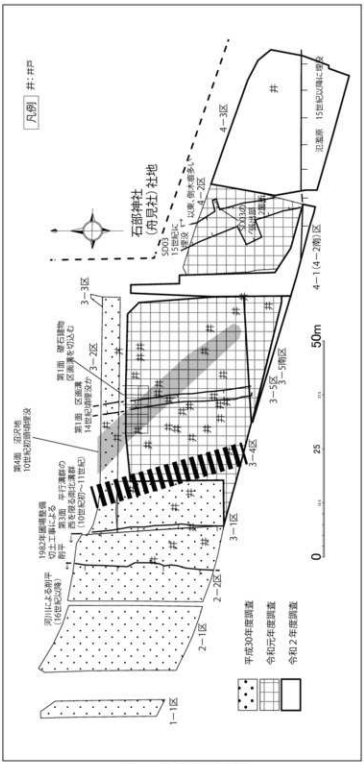
第４面は丘陵裾に形成された遺物包含層である。９世紀末～10世紀初め頃の土器類が出土している。墨書土器が含まれており、字種には「□長」「厨」などが知られた。第2面で取り上げた丘陵側肩部の遺物には10世紀初め頃の軒平瓦が含まれており、また一連の調査を通じて９世紀半ばに遡る土器の

存在が明確では無いことから、当地における造営活動の始点をこの頃に求めることができるかもしれない。

4区では丘陵裾の粘土層が基盤層であったが、井戸壁面に露呈した下位層に砂層があった点からこの粘土層もまた沖積層とみられる。4-1区では古代・中世の遺構が検出された。4-3区は傾斜地であり、南縁は氾濫原とみられる落ち込みとなっていた。この落ち込みは今年度追加調査となった4-2南区において前年度調査SD03の南延長部を削平していた。SD03については出土遺物から15世紀以降に埋没したと考えられることから、4-3区で検出された氾濫原については多量の古代遺物の出土にもかかわらず中世後半期以降の埋没と考えざるを得ない。SD03以東では古代の遺構は乏しく、中世の井戸や柱穴が散在するところを後世の倒木痕跡が随所で攪乱する状況であった。

今回の調査では特に古代について3-4区を中心に前年度までの全調査成果に勝るとも劣らない程の調査知見が得られたものと考えられる。中世遺構の母体ともいえるこれらについて今後さらに検討を行い理解を深め、的確に評価していく必要があろう。

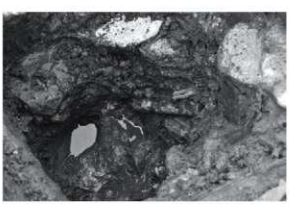
（浜崎悟司）



古府シマ遺跡遺構配置略図

調査地全景（東・現堤防上から）

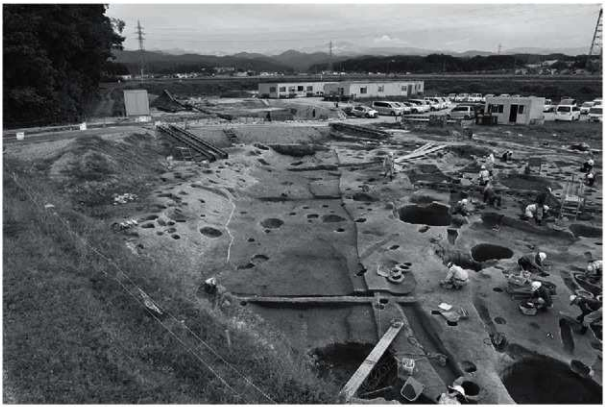
３区中世土師出土状況（上層井戸内）



３区中世土師器出土状況（上層井戸内）

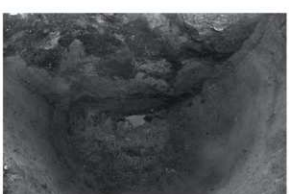
３区遺物（風字硯）出土状況

３区竪穴状遺構（SK102）坑底の状況



3区第４面掘削後の状況

3区第２面井戸遺物出土状況



同左下位土層断面

遺物（軒平瓦）出土状況（3区）

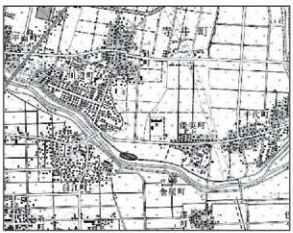
墨書土器「厨」

一針（ひとつはり）C 遺跡（L・M・N区）

所 在 地　小松市一針町地内

調査期間　令和２年４月８日～６月２日、令和２年10月16日～令和３年１月14日

調査面積　3,120㎡（今回報告分1,100㎡）　　調査担当　白田義彦　安中哲徳　水田　勝　小森康弘
山内花緒　奥座　晋（４～10月）



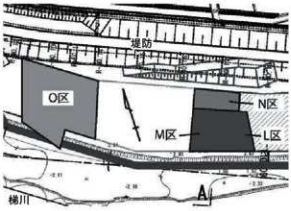
遺跡位置図（S＝1/25,000）

調査成果の要点

・L・M区では、昨年度調査区残りの下面・最下面の調査を実施し、弥生時代後期の周溝を持つ平地建物などの遺構を検出した。
・N区上・中層面では、奈良・平安時代～鎌倉・室町時代の遺構を検出した。
・N区西側寄りの下面では、弥生時代後期～古墳時代の自然流路を検出した。
・N区最下面では、自然流路の下に弥生時代中期の集落外縁を巡る環濠を検出した。

一針Ｃ遺跡は、小松市北部を流れる梯川の中流域右岸に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。平成25年度から、梯川河川改修事業に伴う発掘調査を行っている。

平成30年度および令和元年度は改修前堤防の下を対象に調査を行った。遺跡の遺存状態は良好で、調査区西端部では上・中・下・最下面の計４面を確認した。令和２年度は、春調査で昨年度の残りであるＬ・Ｍ区の下面・最下面およびＮ区の上～下面を調査した。秋調査では、Ｎ区最下面およびＯ区の上～最下面を調査した。今号では、春調査および秋調査のＮ区の成果を中心に紹介する。



調査区割図

調査地遠景（北から）

Ｌ区西側およびＭ区の下面・最下面では、古墳時代終末期頃の土師器や須恵器がまとまって出土した不整形な土坑が複数みられた。

他に、弥生時代中期～後期の平地建物や掘立柱建物などの遺構を検出した。周溝を持つ平地建物は弥生時代後期後半頃とみられ、内側の周溝で直径約11ｍを測る。外周溝は部分的に３重で検出され

ており、同じ場所での建て替えが複数回行われていた状況は、周囲の過年度調査区とも共通する。
また、平地建物の柱穴には柱根が、掘立柱建物の柱穴底には、礎板を持つものもみられた。

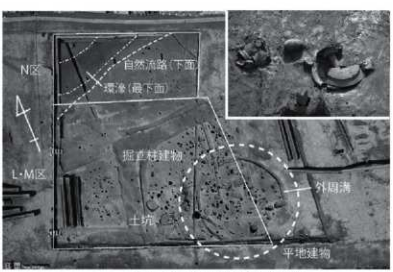
M区北側に位置するN区上・中面は後世の削平により、同一面での検出となったが、中世の溝や柱穴、古墳時代の土坑や溝などの遺構を検出した。

N区西側の下面には、弥生時代後期～古墳時代後期の自然流路がみつかった。流路底近くからは弥生時代後期後半の土器が多く出土しており、梯川の旧流路とみられる。

また、N区最下面では、自然流路の下に断面逆台形の大溝を検出した。上幅約2.5m、下幅約1.4m、深さ約1mを測り、以西で検出される同期の居住域の東縁を巡る、弥生時代中期の環濠の一部とみられる。環濠の土層は、主に上層は黒褐色シルト、中層はオリーブ黒色シルト、下層には灰色シルトが堆積しており、上層からは弥生時代後期後半の、底付近から弥生時代中期後半の土器が出土した。

集落の外縁を囲むように掘られたとみられる環濠は、平成26年度調査時点では、東側に展開する集落域に伴う環濠の可能性も考えていたが、その後の調査により、弥生時代中期後半頃の集落域は遺跡内でも環濠の西側に主に展開していることが判明している。今回の調査成果からも、弥生時代中期に遺跡西寄りに分布していた環濠集落が、環濠埋没後の弥生時代後期になると集落域が広がり、東側の環濠外側へも展開していくことが明らかとなった。　（安中哲徳・西山美那）

N区最下面 環濠土層断面と
遺物出土状況（南西から）



上：L・M・N区下面の調査状況全景
右上：N区最下面 環濠上層から出土した
弥生時代後期後半の土器

N区下面 平地建物完掘状況（北東から）

M区下面 土坑から出土した古墳時代終末期頃の土師器

島（しま）　遺　跡

所 在 地　小松市島町地内　　調査期間　令和２年４月13日～令和２年５月21日
調査面積　290㎡　　調査担当　白田義彦、奥座　普

遺跡位置図（S＝1/25,000）

島遺跡は月津台地の南東部に立地し、北東に木場潟を望む。平成29年度に北陸新幹線建設に伴う調査が実施され、古墳時代終末期、奈良・平安時代、中世の集落を確認した。今回の調査は、本線に沿う取付道路工事に伴うものであり、調査区幅は約３ｍで、前回調査区に接する。調査区は３ヶ所（Ⅳ～Ⅵ区）に分かれており、Ⅳ区（75㎡）、Ⅴ区（150㎡）、Ⅵ区（65㎡）である。

今回の調査では、掘立柱建物の柱穴、土坑、溝などを検出した。掘立柱建物の柱穴は古墳時代終末期、奈良・平安時代のものが主体であり、土坑は不整形で浅いものが多かった。奈良～平安時代の溝は、断面形が逆台形状で、前回調査区の溝に繋がる区画溝と思われる。土層には水流痕跡が認められない。前回調査でも奈良時代～中世の５条の溝を検出しており、水流痕跡のあるものはなかった。調査地は標高８ｍ弱を測る台地上に立地するため、当時の土木技術で用水路を引くことは困難なものと考えられ、近世に入ってから、台地上を流下する矢田野用水が開鑿された。生活用水は井戸から得ており、前回調査でも深さ2.38ｍの井戸（13世紀後半）を検出した。今回の調査では井戸のような深い遺構がなく、深さ１ｍ程の掘削でも湧水はみられず、遺構底からの湧水で調査が滞ることもなかった。

調査中に近所の方から伺った話では、島遺跡の東端、台地東縁から、畑作業中に焼土や土器が多く出土したとのことで、既往の調査成果も加味すれば、遺跡の主体は調査区東側の台地縁周辺に展開するものと考えられる。

（白田義彦）

Ⅳ区遠景（北東から）

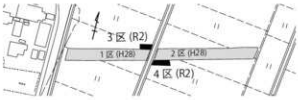
Ⅳ区完掘状況（北から）

梶井衛生センター遺跡

所 在 地　加賀市梶井町地内　　調査期間　令和２年７月８日～令和２年８月５日

調査面積　150㎡　　調査担当　熊谷葉月、中谷光里

調査位置図（S=25,000）



調査区配置図（S=1/4,000）

調査区全景（南東から）

梶井衛生センター遺跡は、加賀市北東部の平野部、柴山潟から南へ２㎞の動橋川右岸に立地する。平成28年度に北陸新幹線建設に伴い、本線部分の2,540㎡の調査が実施され、弥生時代から中世までの集落を確認している。弥生時代中期の平地建物、弥生時代後期の河川跡や溝、平安時代の掘立柱建物、井戸、河川跡を検出した。今回は本線に沿う取付道路工事に伴う調査で、２つの調査区（３区、４区）合わせて150㎡の小規模な調査である。

３区では、平安時代の掘立柱建物の柱穴と平安時代前期の井戸を検出した。井戸の掘り方は直径約120㎝、検出面からの深さ約90㎝で、幅15～20㎝程度の薄い板を縦に打ち込んで側板としており、底面には３～５㎝程度の丸い小石が敷かれていた。「泉」と墨書された須恵器の坏蓋、曲物底板などが出土している。１区でも同様の構造の井戸を確認しており、板先を矢板状に加工していたが、今回その加工は見られなかった。

４区では、弥生時代の溝、土坑、小穴を検出した。溝は幅約２m、深さ0.7m、２区から続いており、４区南端の東岸付近の上面で比較的まとまって弥生時代後期の甕や壺が出土した。

両調査区とも遺構は区外へ伸びており、集落が南北方向にさらに広がることを確認した。

（熊谷葉月）

３区　井戸と掘立柱建物（南から）

４区　弥生時代の溝（南から）

弓波遺跡

所 在 地　加賀市弓波町地内　　調査期間　令和２年７月９日～令和２年８月５日
調査面積　370㎡　　調査担当　白田義彦、奥座　普

遺跡位置図（S＝1/25,000）

弓波遺跡は、加賀市の北部に位置し、江沼平野を流下する八日市川と尾俣川の合流部周辺に展開する大規模な集落遺跡である。平成28年度に北陸新幹線建設に伴う調査を実施し、弥生時代から室町時代の集落や弥生時代の方形周溝墓、削平された古墳などを確認した。平成30年度と令和元年度に北陸新幹線建設関連の取付道路工事等に伴う調査を実施した。今回の調査も取付道路工事に伴うもので、平成28年度調査区（古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物を検出したＧ区）に接する。幅約４ｍ、長さ約85ｍの調査区において、東部では柱穴、溝などを、また西部では旧八日市川の流路を検出した。東部の柱穴は、Ｇ区で検出した掘立柱建物と同時期の可能性が高いと考えられる。旧八日市川の覆土からは、摩滅した土師器片が目に付いた程度であり、時期の比定は、今後の遺物整理作業に期待したい。旧八日市川の深さを確認するため、トレンチを入れたところ、検出面から深さ1.3ｍで地山面（明青灰砂）を確認した。　（白田義彦）

調査区遠景（北西から）

弓波（ゆみなみ）コマダラヒモン遺跡

所 在 地　加賀市弓波町、作見町地内　　調査期間　令和２年５月20日～令和２年６月29日
調査面積　700㎡　　調査担当　白田義彦、奥座　菩

遺跡位置図（S＝1/25,000）

調査成果の要点

・弥生時代後期～古墳時代の集落跡を確認した。
・弥生後期～古墳時代の土坑、大溝を検出した。
・弥生時代後期～中世の溝を検出した。
・弥生時代後期の土器、赤色漆彩文容器、木製品、古墳時代の土器、石製品が出土した。

本遺跡は、加賀市北部に広がる江沼平野の北方、八日市川左岸に立地する。平成28年度に北陸新幹線建設に伴う調査（A・B区）を実施し、弥生～古墳時代の集落を確認した。今回の調査は、北陸新幹線建設関連の取付道路工事に伴う調査である。調査区は幅４m、長さ134mの狭長な範囲であり、前回調査区の南側に接している。

調査区をC区、D区とし、C区では古墳時代の土坑、古墳時代～中世の溝などを検出し、D区では弥生時代後期～古墳時代の大溝、弥生時代後期～古墳時代の土坑、弥生時代後期～中世の溝を検出した。

D区大溝は、北側で上幅11.5mを測り、大溝の下部でさらに掘り込みが見られる。大溝下部の断面形は緩やかに立ち上がる幅広のU字形で、下部の掘り込みは北側で上幅3.1mを測り、溝底はやや東へ屈曲する。遺構検出面からの深さは1.25mで、溝底の標高は、北端で1.65m、中央部で1.57m、南端で1.46mを測り、北から南へ流下したものと考えられる。

覆土は上層の黒褐色腐植土（古墳時代中期の土器主体）と中層の黒褐色腐植土（弥生時代終末期～古墳時代前期の土器を含み、主体は弥生時代後期後半）と下層の褐灰腐植土・褐灰色砂質土（弥生時代後期後半）に大きく分層できる。弥生時代後期後半は水流が認められるが、徐々に淀みとなって、埋没した過程が考えられる。溝底に近い下層の褐灰色腐植土から、全国的に注目される赤色漆彩文容器（樹種：トチノキ）が、内面を上にして出土した。それと共伴する土器は、前述のとおり下層の弥生時代後期後半のものである。その他、下層からは、箸状木製品、サクラと思われる樹皮なども出土した。

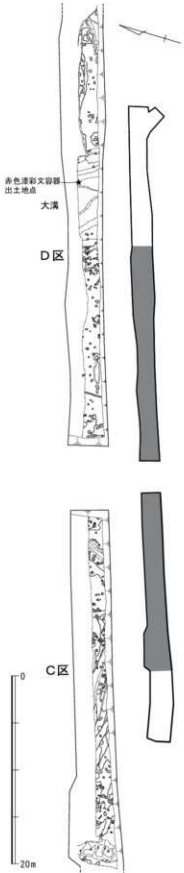
（白田義彦）

調査区配置図（S＝1/5,000）

大溝土器出土状況（北から）

赤色漆彩文容器出土状況（西から）

大溝完掘状況（西から）



主要遺構図（S＝1/400）

赤色漆彩文容器について

赤色漆彩文容器は、横木取りの刳物（樹種はトチノキ）で、体部が直線的に立ち上がる合子状の円筒形容器と考えられるが、下部は欠損しており、完形に復元できない。口径は17.8cm、残存高9.2cmを測り、黒漆地に赤色漆で描画するもので、口縁部下に半円形の耳（形状は半円が連なる３の字状の可能性もある）を持つ。耳は対になるとみられ、耳の上面には貫通孔（直径３mm）と未貫通孔（直径２ミリ、深さ２mm）を穿つ。

口縁部下と胴部に突帯を廻らし、胴部の突帯はやや太く、その突帯間（幅7.0cm）に横位の列点文と細線を横帯状に施文する。耳下には花弁様のベタ塗りが見られ、横帯状文様を区画する役割を持つ。口縁部から直下の突帯まで赤色漆をベタ塗りし、突帯下に列点文を１条廻らし、その下に2.5mm間隔で細線を３条廻らす。その細線から６mmの間隔を開け、２条の細線（間隔1.7cm）間に極細線を等間隔に８条線描し、これを一単位とする横帯状文様を施文する。それと文様構成が同様で、やや狭い横帯状文様（幅1.4cm）を胴部の突帯上方に施文する。内面にはヤリガンナによる加工痕が明瞭に残り、生漆が塗られている可能性がある。

北陸では、弥生時代の漆器が少ないが、西日本では比較的多くの出土例がある。特に北部九州で多く、愛媛大学の田崎博之氏が集成されている。以下では田崎氏の論考を基に記述したい。表は田崎氏の論考で紹介された彩文漆器のうち、比較的器形が分かるものを挙げ、次頁に実測図を掲載した。①の高坏の裾部に描かれた木の葉文は弥生前期的な意匠といえる。弥生時代前期中頃～中期初頭には、②の様に、赤色漆のベタ塗りで下地の黒漆を浮き出させて植物文様を表現するものや、③と④の様な赤漆の細線で幾何学的文様を描くものが現れる。

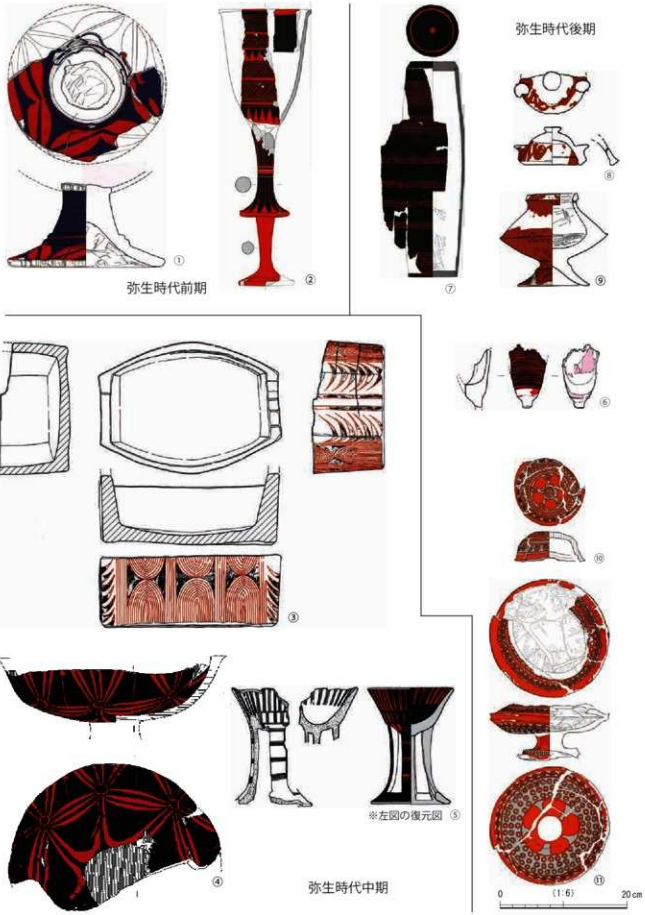
田崎氏は、「日本列島では、東日本も含めて縄文時代～弥生時代前期の漆器は全面を赤漆でベタ塗りしたものが多いが、弥生時代前期中頃以降、黒漆で塗った漆器へと変化していく。赤漆彩文漆器では、植物文様の赤漆によるベタ塗り表現から、赤漆のベタ塗りで下地の黒漆を浮き出させて文様を表現する手法の登場、さらに直線文や斜格子文、羽状文の幾何学文様の細線表出へと移り変わっていく。」とまとめられている。（白田義彦）

赤色漆彩文容器の耳

西日本の弥生時代彩文漆器一覧

NO.	器種	遺跡名	遺構名等	時期	全長(cm) 口径	幅(cm) 器高	厚さ(cm) 底径	樹種	報告書
①	高坏	唐古・鍵	SK201	弥生時代前期		(13.3)	24.9	クスノキ	田原本町教育委員会　2009 『唐古・鍵遺跡　I　－範囲確認調査－』
②	脚付坏	里田原	河道 (460区)	弥生時代前期後半 ～前期終末	14.4	44.0	8.8	センダン	長崎県田平町教育委員会　1988『里田原』 （公財）愛媛県埋蔵文化財センター他　2018『伊予の木工芸』
③	槽	生立ヶ原	SK84	弥生時代中期前半	(28.5)	(11.0)	36.8	チシャノキ	佐賀県牛津町教育委員会 1995『生立ヶ原遺跡－出土木製品図録篇』
④	高坏	南方 （清生会）	河道下層	弥生時代中期中葉	34.0	(10.4)	1.3	ケヤキ	岡山市教育委員会　2005『南方（清生会）遺跡－本器編－』
⑤	脚付坏	瓦町	SK239	弥生時代中期後葉	13.4	18.6	12.3		佐賀市教育委員会　1992『瓦町遺跡』
⑥	有脚坏	元岡・桑原	SD 2 （自然流路）	弥生時代中期後葉 ～後期	(10.0)	(5.7)			福岡市教育委員会　2014『元岡・桑原遺跡群23』
⑦	円筒型 容器	今宿五郎江	SD 1	弥生時代後期中頃 ～終末期	8.2	幅9.8 器高31.2	7.6	サクラ属	福岡市教育委員会　2010『今宿五郎江８』 （公財）愛媛県埋蔵文化財センター他　2018『伊予の木工芸』
⑧	蓋	吉谷上寺地	SD38	弥生時代後期	8.4	6.1	1.2	ヤマグワ	鳥取県埋蔵文化財センター　2005『吉谷上寺地遺跡出土品調査研究報告１　木製容器・かご』
⑨	壺	〃	SD38	弥生時代後期	8.0	14.6	11.6	ヤマグワ	〃
⑩	蓋	〃	SD56	弥生時代後期初頭 ～後葉	11.1	4.9	0.9	モクレン科 モクレン属	〃
⑪	脚付壺	〃	SD38	弥生時代後期初頭 ～後葉		幅19.0 器高19.0	1.4	バラ科 サクラ属	〃

［参考・引用文献］
田崎博之　2018『漆工芸の歴史－西日本地域の弥生時代漆器を中心として－』『伊予の木工芸』（公財）愛媛県埋蔵文化財センター他



※③～⑥は各報告書実測図に加筆。

西日本の弥生時代彩文漆器（S＝1/6）

令和２年度上半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

令和２年度上半期は八日市地方遺跡（小松市　平成29年度調査）、柳田猫ノ目遺跡他３遺跡（羽咋市　平成27～30年度調査）、古宮遺跡（白山市　平成30年度調査）の整理を行った。

八日市遺跡では、金属器と木製品の実測・トレース、記名・分類・接合は昨年度の継続で１区の残り106箱の整理を行った。金属器は鋼鏃、湯口ばり、木製品は貯水枡の建材、導水施設の部材、槽等を実測・トレースした。木製品の実測・トレースは特定関係調査グループと合同で行った。記名・分類・接合では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く、他に炉壁、鞴の羽口等があった。また用途不明のものもあった。

柳田猫ノ目遺跡他３遺跡は特定関係調査グループ、古宮遺跡は県関係調査グループの報告をご覧いただきたい。

（横山そのみ）

土器の選別（八日市遺跡）

貯水桝の側板（八日市遺跡）

貯水桝仕切り板の実測（八日市遺跡）

用途不明品（八日市遺跡）

県関係調査グループ

上半期は、梶井衛生センター遺跡（加賀市　平成28年度調査）、大泊Ａ遺跡（七尾市　平成22年度調査）、漆町遺跡（小松市　平成27年度調査）、古宮遺跡（白山市　平成30年度調査）、八日市地方遺跡（小松市　平成27～29年度調査）、弓波遺跡（加賀市　平成28年度調査）の整理作業を行った。

梶井衛生センター遺跡は、大型木製品の実測・トレースを行った。舟底板を井戸枠に転用した遺物で大きく重さもあり１人では動かす事が出来ず沢山の方に手伝ってもらいながらの実測となった。

大泊Ａ遺跡は、木製品の実測・トレースを行った。

漆町遺跡は、染付を中心に灰釉皿・青磁碗や、越前焼の甕や鉢等の実測・トレースを行ったが小片が多く傾きに苦労した。

古宮遺跡は、土器・金属・木製品・石製品の実測・トレースを行った。土器は土師器の皿や柱状高台の皿や碗、石製品は石垣等大型遺物の実測が多かった。

八日市地方遺跡は、木製品の柱・井戸枠・建築部材・板材等の実測・トレースを行った。

弓波遺跡は、須恵器の大甕・坩堝・羽口・鉄滓・石製の硯の実測・トレースと土器の記名・分類・接合を行った。　（小島紀子）

井戸枠（梶井衛生センター遺跡）

須恵器大甕の実測（弓波遺跡）

石垣石材の実測（古宮遺跡）

柱の実測（八日市地方遺跡）

特定事業調査グループ

上半期は、洲衛中世墳墓（輪島市　平成30年度調査）、八日市遺跡（加賀市　平成29年度調査）金沢城跡（金沢市　平成29～令和元年度調査）、柳田猫ノ目遺跡他３遺跡（羽咋市　平成27～30年度調査）の整理作業を行った。

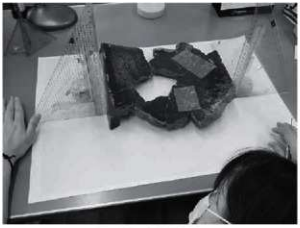
洲衛中世墳墓では、記名・分類・接合、出土品実測・トレース作業を行った。出土遺物は少なく、中世の陶磁器が少量と須恵器の破片や瓦の破片などが出土していた。

金沢城跡では、記名・分類・接合、実測・トレース作業を行った。記名・分類・接合作業では、初めて見る瓦や、越前の瓦などがあった。瓦の接合を終えるごとに、袋ごとの重さを量り表に記入する作業もあり、少し手間取った。実測・トレース作業では、石製品の実測に予想以上に手間取った。

柳田猫ノ目遺跡他３遺跡では、出土品実測を行った。土器は土師器が多く、柱状高台のものが多く、墨書土器も多くあった。出土品実測・トレース作業は下半期に続く。

八日市遺跡は、国関係調査グループの報告をご覧ください。

（土生久美子）



瓦の実測（金沢城跡）

石製品の接合（金沢城跡）

土器の接合（州衛中世墳墓）

土器の実測（柳田猫ノ目遺跡）

加茂遺跡南大溝地区に関する覚書　－主要遺構の整理に向けて－

川畑　誠

1．はじめに

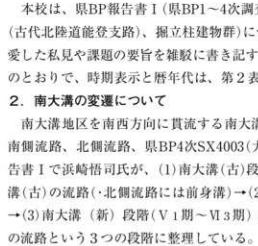
加茂遺跡は、石川県河北郡津幡町舟橋・加茂地内の沖積地に立地する縄文時代中期後半～中世の複合遺跡であり、南北約400m、東西約500mの範囲に広がる。本遺跡の調査は、津幡北バイパス(計11次。1991～2005。石川県教育委員会・(社法)石川県埋蔵文化財保存協会(1991～94)・(財)石川県埋蔵文化財センター(1999～)。以下、県BP調査)、河北縦断道路(計７次。2005～11。以下、県縦断調査)、また津幡町教育委員会による保存を目的とした確認調査(計21次。2001～11。以下、町調査)がおこなわれ、報告書の刊行とともに様相が次第に明らかとなりつつある[(1)～(6)]。

特に、奈良～平安時代前期の集落構造は、旧舟橋川両岸の微高地に分水(南・北大溝)し、「北大溝地区」、「南大溝地区」とも建物域が長期間存続することを基本に推移する(第１図)。この両大溝を介して西側の旧河北潟・舟橋フゴと東側の古代北陸道能登支路をつなぐ水陸交通の要衝として、いわゆる地方末端官衙を含む多様な機能をもつ遺跡と評され、その一端は重要文化財「加賀郡牓示札」や過所様木簡、「英太」、「鴨寺」、「曹」等の豊富な墨書土器等からも、うかがい知ることができる。

本校は、県BP報告書Ⅰ(県BP1～4次調査)に掲載された南大溝地区の主要遺構(南大溝、道路遺構(古代北陸道能登支路)、掘立柱建物群)について、県BP報告書Ⅱ(県BP5次調査)で紙面の関係から割愛した私見や課題の要旨を雑駁に書き記すものである。なお、県BP報告書Ⅰ掲載の変遷案は第１表[(7)]のとおりで、時期表示と暦年代は、第２表を参照されたい[(8)]。

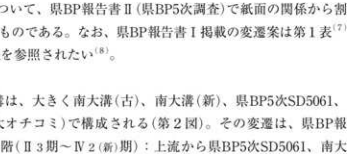
2．南大溝の変遷について

南大溝地区を南西方向に貫流する南大溝は、大きく南大溝(古)、南大溝(新)、県BP5次SD5061、南側流路、北側流路、県BP4次SX4003(大オチコミ)で構成される(第２図)。その変遷は、県BP報告書Ⅰで浜崎悟司氏が、(1)南大溝(古)段階(Ⅱ３期～Ⅳ２(新)期)：上流から県BP5次SD5061、南大溝(古)の流路(・北側流路には前身溝)→(2)上流域の埋め立て・付け替え(Ⅳ2(新)期末～Ⅴ1期初頭)→(3)南大溝（新）段階(Ⅴ１期～Ⅵ３期)：上流から県BP4次SX4003、南側・北側流路、南大溝(新)の流路という３つの段階に整理している。南地区掘立柱建物群の北限ラインを加味すれば、北側流路の前身溝の存在を含めて、おおむね首肯しうる変遷案と考える(第１表)。このうち、(1)から(2)の過程、(3)について、若干の修正を提起したい。



第１図 加茂遺跡の地区名称 (S=1/4,000)

第１表 県 BP 報告書Ⅰの加茂遺跡南大溝地区変遷表



註(1) 文献から転載。一部改変。

まず、南大溝(古)から埋め立てまでの過程に関して、県BP報告書Ⅰには、ほぼ重複する南大溝(古)・(新)の土層堆積状況が掲載されている(第２図断面③～⑥)。南大溝(古)の上位堆積土(第２図薄い網掛け表示)は、遺構検出面の標高まで堆積し、断面③で黄灰色砂質土(無遺物、間層)、断面⑤で褐黄色砂・黄灰色砂、断面⑥で濁黄灰色(間層)・黄灰色砂と記される。浜崎氏と同様に、これらの堆積土は短期間に流入・堆積した土砂とみるのが妥当と考える。また、第２図断面図との対応関係は判然としないが、県BP報告書Ⅰの遺物観察表で、南大溝(古)と記された土器(1002～07、1229、1247～50、1469～72、1601～13、1776・77、1830～41・43・44、1949・52・85・87、2101～23)は、Ⅱ３期を主体に一部Ⅳ１期初頭までの時期幅を示す。これら２点から、県BP報告書Ⅰの南大溝(古)は、県BP4次以東の流路に課題を残すものの、(1-a)Ⅳ１期初頭に完全に埋没し、併せて南大溝地区の建物群も一時途絶した可能性を指摘しておきたい(建物群変遷は後述)。その後、(1-b)県BP5次SD5061から流下する新たな流路(仮に南大溝(中))を、下流域は南大溝(古)と重複する位置に開削し、(2)Ⅳ２(新)期末～Ⅴ１期頭にSD5061を含む流路の一部を埋め立てて(埋土：第２図断面④・⑦網掛け)、道路遺構西側溝を起点とする、より直線的な新流路(南大溝(新))に付け替えたと考える。

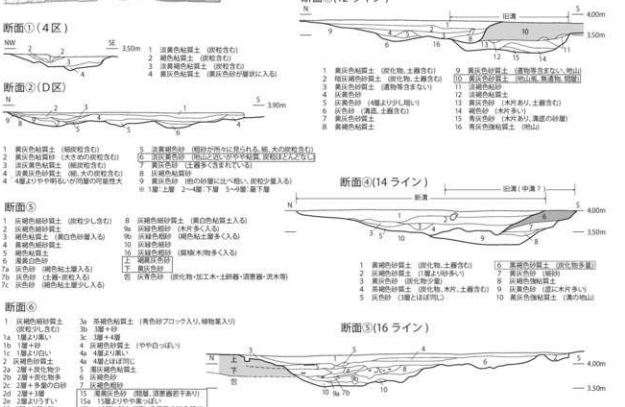
第２表 加賀・能登の古代土器編年と暦年代対比表

時期区分	想定年代	備考
Ⅰ期	6世紀末～7世紀中頃	飛鳥Ⅰ・Ⅱ
Ⅱ1期	7世紀中葉後半	飛鳥Ⅲ
Ⅱ2期	7世紀末	飛鳥Ⅳ
Ⅱ3期	8世紀初頭	平城Ⅰ
Ⅲ期	8世紀前葉	平城Ⅱ
Ⅳ1期	8世紀中頃	長岡京
Ⅳ2(古)期	8世紀後葉	
Ⅳ2(新)期	8世紀末～9世紀初頭	
Ⅴ1期	9世紀前葉	
Ⅴ2期	9世紀中頃	
Ⅵ1期	9世紀後葉	K-90
Ⅵ2期	9世紀末～10世紀初頭	
Ⅵ3期	10世紀前葉	O-53
Ⅶ1期	10世紀中葉	
Ⅶ2(古)期	10世紀後葉	
Ⅶ2(新)期	11世紀前葉	

暦年代	田嶋明人(2012)	北陸古記(1997a・b)	望月精司(2008・10)
750	Ⅱ期		4A期(Ⅱ期前～Ⅳ1期(古))
	Ⅳ1期	上荒屋1期(Ⅳ1古期)	4B期(Ⅳ1期(古))
800	Ⅳ2期(古)	上荒屋2期(Ⅳ2期(古)	5A期(Ⅳ2期(古))
	Ⅳ2期(新)	上荒屋3期(Ⅳ2期(新)	5B期(Ⅴ1期)
850	Ⅴ1期	1-1期(Ⅴ1期)	6C期(Ⅴ2期)
	Ⅴ2期	1-2・3期(Ⅴ2期)	6A期(Ⅵ1期)
900	Ⅵ1期	1-3・4期(Ⅵ1期)	6B期(Ⅵ2期)
	Ⅵ2期	Ⅱ-1期(Ⅵ2期)	
950	Ⅵ3期	Ⅱ-1期(Ⅵ3期)	6C期(Ⅵ3期)
	Ⅶ1期	Ⅱ-2古期(Ⅶ1期)	7A期(Ⅶ1期)
1000	Ⅶ2期	Ⅱ-2新・3期(Ⅶ2期(古))	7B期(Ⅶ2期(古))
	Ⅶ2期(古)	Ⅲ-1・2期(Ⅶ2期(新))	7C期(Ⅶ2期(新))
	Ⅶ2期(新)		8A期(中世Ⅰ-1期)
1050	中世Ⅰ-1期	Ⅳ-1期(中世Ⅰ-1期)	8B

※右表は、註(6)文献より作成。

次に、南大溝(新)段階の南側・北側流路について触れたい。第２図のとおり、新しく開削した流路では、道路遺構西側溝を起点に、直線的な南側流路(延長約50m。上流から県BP4次SX4003・SD4019、県BP6次SD02、県BP5次大溝南側流路、県BP8次A区第１面SD2015、県BP3次遺構名なしを仮称)と、北側流路(延長約180m。上流から県BP4次SX4003・大溝、県BP6次SD01、県BP5次大溝北側流路、県BP8次SD2057、県BP1～3次大溝を仮称)が上記の流路を直線化した範囲で、２～３m隔てて並走するように検出されている。県BP報告書Ⅰでは、北側流路を南大溝(新)と、また南側流路を第１表２期(Ⅴ１期～Ⅵ２期)に属する耕作地(畠地)への用水路と評価し、南・北側流路間を通路と考える。北側流路を南大溝(新)とすることに異存はなく、ここでは南側流路の機能時期、性格を考えるため、改めて事実関係を整理したい。県BP4次SD4019は幅160cmを測り、土層断面で新(深)・旧(浅)を確認、覆土は粘土、粘質土(県BP報告書Ⅰ第90図土層８～10)となる。県BP5次調査では、北側流路を完掘した後に重複する位置で南側流路底付近を検出(県BP報告書Ⅱ第60図)、断面は逆台形を基調とする。覆土は緑灰～灰褐色粘質土であり、出土遺物はⅥ２期を主体にⅥ３期初頭頃を下限とする。また、県BP6次SD02は、重複する新旧２つの溝として検出、幅１～1.2m、深さ約20cm(旧)・約50cm(新)を測る。断面は逆台形状を呈し、粘質土を覆土とする。これらから、①南側流路は２度掘削され、流水痕跡のない粘質土が自然堆積し埋まること、②掘削時の断面形状を比較的良好に保持する状況から比較的短期のうちに埋没した可能性が高いこと、③南側流路は、新しい顕著な流水痕跡をもつ北側流路



第2図　南大溝平面図・土層断面図(S=1/1,200・1/80)

(南大溝(新))の埋没に先行して、遅くともⅥ3期初頭項までに埋没したこと等が指摘できる。異なる機能を予想させる両流路が並走する景観は、Ⅵ2期を中心とした比較的短い期間であった可能性がある。いずれにしても、南大溝の最終的な変遷は、南大溝(中)・南大溝(新)・北側流路・南側流路が重複する県BP8次調査の報告を待つしかなく、現時点での試案として書き留めておきたい。なお、南大溝(新)の終焉をⅦ1期初頭項と考えるが、道路遺構の変遷と併せて、次節で述べる。

3．道路遺構について

東西両側に新旧2段階の側溝を伴う道路遺構は、県BP4・5・8次調査、町調査1・7次調査において直線延長約330m(N-27°W)を検出、古代北陸道能登支路と考えられている。県BP報告書Ⅰでは、路面を多量の板材・棒材で補強した砂・砂質土で盛土(最大厚約45cm)と報告、その変遷は、第1表のとおりである。今回、県BP4・5次調査の検討で、いくつかの所見が得られたため、改めて時系列に沿って記す。

旧側溝段階：南大溝(新)との接続箇所(SX4003付近)を境に、南北で溝心心距離が異なり、SX4003以南が9.0～9.8m、以北が8.1m前後(推定)を測る。これから、南大溝(新)に先立つ何らかの区画(溝か)が想定でき、この区画を境に敷設当初から路面幅が異なったと考えられる。また、東旧側溝(底標高4.23～4.39m)は、SX4003以南の西旧側溝(同4.40～4.48m)に比して10～20cm深く(第3図)、東側丘陵方向からの雨水を考慮した妥当な工法といえる。敷設期は不明ながら、道路遺構と主軸方位が一致する県BP5次SI5001(第6図。道路遺構の維持施設か)からⅣ2(古)期まで確実にさかのぼる。

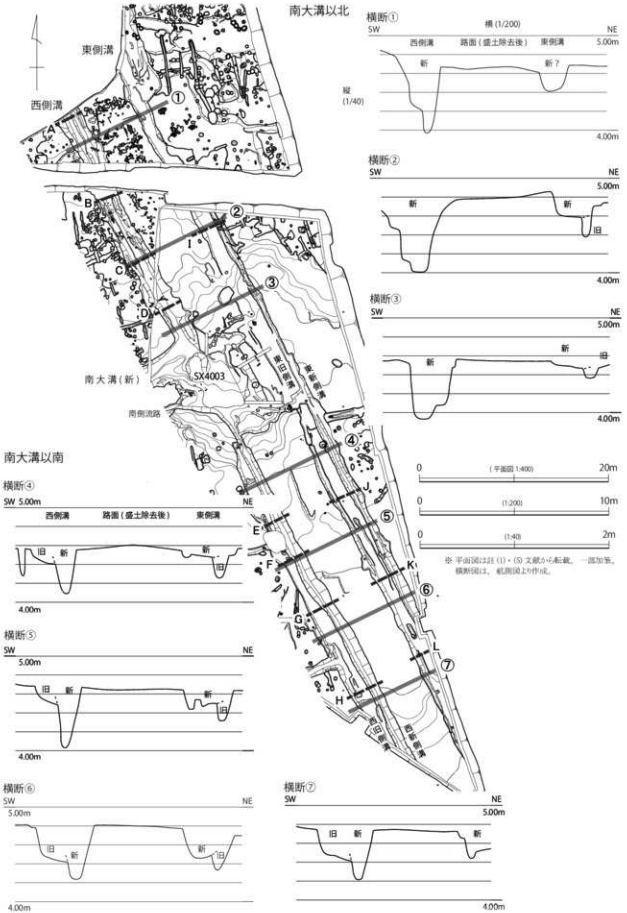
路面幅の縮小：東新側溝(底標高4.38～4.61m)は、西側(路面側)に寄って一体的に掘られる。一方、西新側溝は、南大溝(新)との接続箇所(SX4003付近)を境に南北で縮小方法が異なる。SX4003以南の西新側溝が、東新側溝と同様に路面寄りに新掘するのに対して、SX4003以北の西新側溝は旧側溝と同位置に掘られる。西旧側溝廃絶後の堆積土出土の遺物(第5図)は、Ⅴ1期(0747・48・51)とⅥ2期(0744・45・49)にまとまりをもつ。この路面幅の縮小期については、前述のとおり南大溝の付け替えと一体となるⅤ1期頃と考えられる。

新側溝機能段階：両側溝の最終期(調査検出時)の状況から、両側溝間に機能、廃絶期の差異が指摘できる。機能差は、両新側溝底の標高に端的に現れ、東新側溝が4.38～4.61m、SX4003以南の西新側溝が4.03～4.22m、SX4003以北の西新側溝が3.94～4.01mを測る。西新側溝は、東新側溝よりかなり深く掘られ、南大溝(新)に流下する基幹水路機能を兼ねたものと理解する[9]。

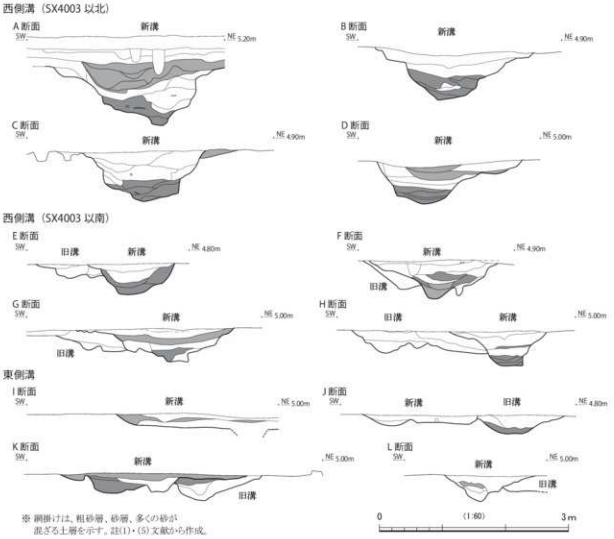
路面の改修(盛土)：県BP4次路面出土遺物(第5図)のうち、須恵器有台埦0890・0892を含めてⅥ2期末頃を下限とし、県BP5次路面出土遺物は多くがⅥ2期に属する。遺物の時期的まとまりから、Ⅵ2期末頃に盛土を伴う大規模な路面の改修がおこなわれ、その際には、盛土補強材として木材に加えて、多量の須恵器貯蔵具を含む土器片を用いる。

新側溝埋没段階：両側溝の堆積土、出土遺物の時期が異なるため、前述の機能差を反映した埋没(廃絶)時期の差を指摘したい。東新側溝は、主に粘質土が堆積(第4図)、出土遺物はⅥ2期を下限とする。一方、西新側溝は、流水に伴う粗砂・砂層(第4図濃い網掛け)、道路盛土(砂・砂質土)の流出土層(同図淡い網掛け)が顕著に確認できる。出土遺物はⅥ2期を主体に、県BP5次西新側溝上位層および南大溝(新)にⅥ3期の土師器が少量混ざる。これらから、前述の大規模な路面改修後、ほどなく東新側溝の埋没(官道としての維持管理の放棄)が急速に進み、基幹水路として維持された西新側溝・南大溝(新)もⅥ3期には埋没過程(＝路面盛土の流出)に入ったと考えられる。なお、県BP4次SX4003は、西新側溝の基幹水路機能と自然災害との係りで位置付けたいが、定見を得ていない。

「盛土層」道路段階：県報告書Ⅰでは、新側溝をもつ官道より新しい「盛土層」道路を想定するが、前



第3図　道路遺構平面図・横断図（S=1/400・1/200・1/40）



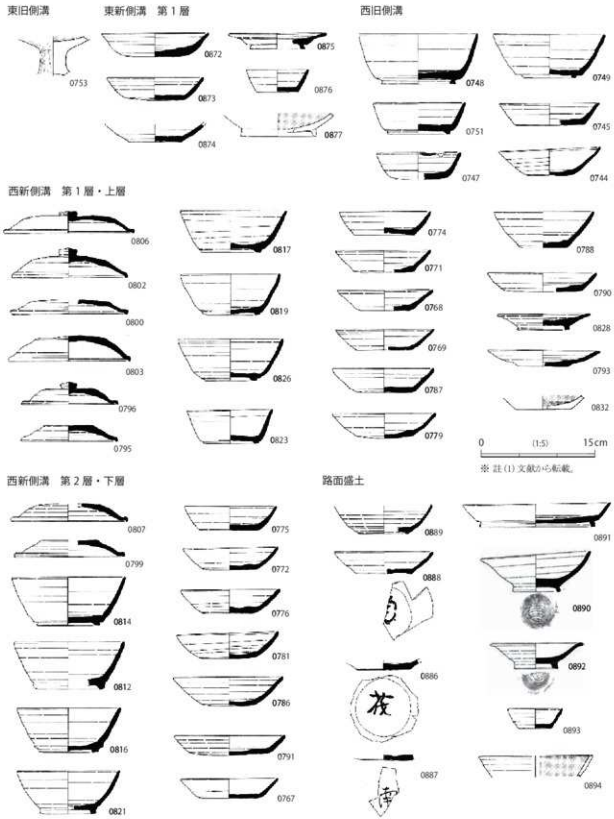
第４図 道路遺構土層断面図（S=1/60）

述の路面盛土の流出と、耕土直下による土壌硬化として整理したい。ただし、道路機能の維持は続くものと考える。従前からの南大溝地区の土地区画は、地区全体が耕作地（畠地）に転ずるⅦ期まで継承される。

４．掘立柱建物群の変遷について

南大溝の両岸に展開する県BP1～4次調査の掘立柱建物群については、浜崎、田嶋明人両氏の建物の復元案および変遷案を紹介する。両氏の案に、県５次調査建物を加えたものを、第３表、第６～９図に示した[10]が、両氏の見解は大きく異なり、南大溝地区の評価に直結する重要な課題と考える。

浜崎氏は、南・北区で82棟（うち６棟は中世）を復元する（第３表）。南区の柱穴が密集する３ヶ所の建物復元（SB35～38建物群、SB46～49建物群、SB64～66建物群）に保留部分を残しつつも、大型建物主軸方位のまとまりや柱穴出土遺物の検討から、４つの期（浜崎１～３期、第１表）に建物群変遷を整理する（第６・７図）。田嶋氏が長舎の主屋級建物とした柱穴群を建物の重複と理解した復元案であり、結果として比較的小規模な建物が主屋級となる。浜崎１期（Ⅲ～Ⅳ２（新）期）は、Ⅲ期に南大溝地区両岸（南・北地区）で建物が成立する。南地区全体としてSB35～38建物群を中心に、複数の比較的小規模な建物グループ（側柱倉庫・雑舎主体。N-4～15°W）が成立・併存する大きな盛期との評価となろう。主屋級建物は、重複するSB35（側３×３間、55.7㎡）、SB36（側5×3間、78㎡）、SB37（側４×



第5図　第4次調査道路遺構出土遺物実測図(S=1/5)

２間、55.4㎡)、SB38(側４×３間、62.9㎡)、SB66(側３×２間、43.5㎡)があり、特徴的なSB07(総３×３間、67.6㎡)は、金沢市八日市サカイマツ遺跡SB19(49㎡)に類するプランをもつ。

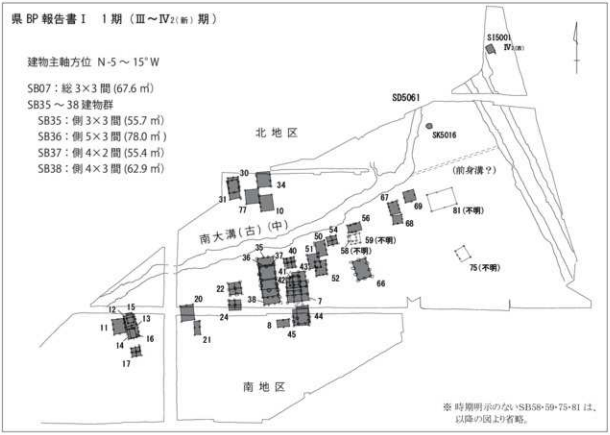
浜崎２期(N-15～23°W)は、主屋級の建物のみ２期前半(おおむねⅤ期)、２期後半(同Ⅵ１期・Ⅵ２期)

第3表　南大溝地区の掘立柱建物対比表

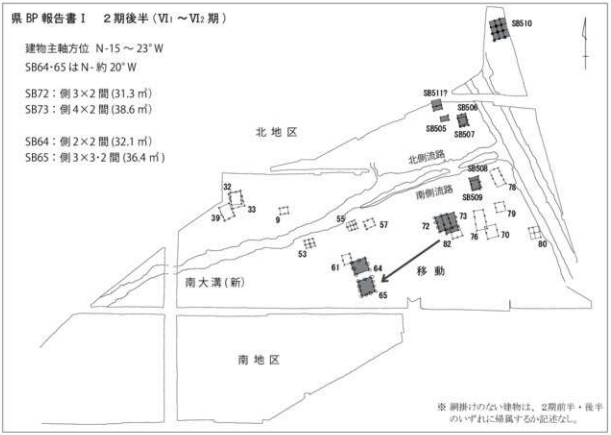
※ 網掛け・太文字は、旧概況によるプラン等の変更を示す。

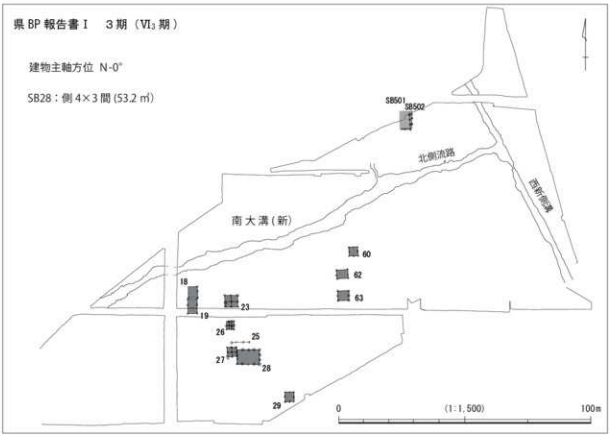
	遺構名	プラン区分	主柱構造	柱配置(軸×軸)	床面積(㎡)	桁行(m)	梁間(m)	主軸方位	柱1特徴	町時間
	SB01		総柱	3×3間	55.2	7.62	7.25	N-3°-東	中世	-
	SB001	**変更**	**総柱**	**3×2間**	**35.8**	**7.62**	**4.70**	**N-3°-東**	**-**	**12c ～**
	SB02	一致	総柱	4×2間	32.8	7.66	4.27	N-11°-東	中世	12c ～
	SB03	一致	総柱	5×4間	109.7	11.58	9.47	N-2°-東	中世	12c ～
	SB04	一致	総柱	4×4間	96.6	9.97	9.89	N-1°-西	中世	-
	SB04	**変更**	**総柱**	**5×4間**	**123.2**	**12.46**	**9.89**	**N-1°-西**	**-**	**12c ～**
	SB05		総柱	3×2間	24.5	5.68	4.31	N-83°-東	中世	-
	SB05	**変更**	**総柱**	**2～×1～間**	**-**	**4.30 ～**	**1.87 ～**	**N-7°-西**	**-**	**12c ～**
	SB06	一致	総柱	3×2間	31.0	6.58	4.71	N-4°-東	中世	12c ～
	SB07		総柱	3×3間	67.6	8.39	8.06	N-85°-東	1期	-
	SB07	**変更**	**側柱**	**4×2間**	**55.4**	**9.90**	**5.60**	**N-85°-東**	**-**	**3段階①-2**
	SB08	一致	側柱	2×1間	14.0	4.84	2.90	N-82°-東	1期	3段階①-2
	SB09	未検討	側柱	2×1間	7.8	3.95	2.45	N-72°-東	2期	(未検討)
	SB10		側柱	4×2間	32.1	6.30	5.10	N-7°-西	1期	-
	SB34		側柱	2～×1間	24.2 ～	4.47 ～	5.41	N-7°-西	1期	-
	SB10	**変更**	**側柱**	**2×1間**	**14.3**	**5.10**	**2.80**	**N-83°-東**	**-**	**3段階①-3**
	SB04	**変更**	**側柱**	**3～×2間**	**42.2 ～**	**7.80 ～**	**5.41**	**N-7°-西**	**-**	**3段階①-3**
	SB11	一致	側柱	3×2間	28.5	5.94	4.80	N-9°-西	1期	3段階①-3
	SB12		側柱	2～×2間	18.9 ～	4.36 ～	4.33	N-15°-西	1期	-
	SB12	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**18.9**	**4.36**	**4.33**	**N-15°-西**	**-**	**3段階①**
	SB13	(なし)	側柱	2×2間	16.3	4.37	4.19	N-75°-東	1期	(記載なし)
	SB14		側柱	2×2間	16.6	4.36	3.80	N-78°-東	1期	-
	SB14	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**16.6**	**4.36**	**3.80**	**N-78°-東**	**-**	**3段階②**
	SB15		側柱	2×1間	9.5	4.02	2.38	N-13°-西	1期	-
	SB15	**変更**	**総柱**	**2？×2間**	**9.5 ～**	**2.38 ～**	**4.02**	**N-77°-東**	**-**	**3段階①-3**
	SB16		側柱	2×1間	7.9	3.70	2.14	N-14°-西	1期	-
	SB16	**変更**	**総柱**	**2？×2間**	**7.9 ～**	**2.14 ～**	**3.70**	**N-76°-東**	**-**	**3段階①-3**
	SB17	一致	側柱	2×2間	13.3	3.68	3.61	N-81°-東	1期	3段階①-3
	SB18	未検討	側柱	3×2間	18.9	4.72	4.01	N-2°-西	3期	(記載なし)
	SB19	未検討	側柱	1～×1間	4.1 ～	2.14	1.94	N-2°-西	3期	(記載なし)
	SB20	未検討	側柱	3×2間	31.4	6.10	5.15	N-6°-西	1期	(記載なし)
	SB21	未検討	側柱	2×1間	13.1	5.40	2.42	N-4°-西	1期	(記載なし)
	SB22	一致	側柱	2×2間	22.7	4.84	4.69	N-81°-東	1期	3段階①-3
	SB23	一致	側柱	2×2間	23.5	5.13	4.59	N-89°-東	3期	2段階
	SB24	一致	側柱	2×2間	20.2	4.92	4.11	N-89°-東	1期	3段階①-1
	SB25	一致	側柱か	3×？間	-	7.06	-	N-89°-東	3期	2段階
	SB26		側柱	2×3間	10.0	3.29	3.05	N-0°	3期	-
	SB26	**変更**	**側柱**	**1×1間**	**10.0**	**3.29**	**3.05**	**N-0°**	**-**	**3段階①-1**
	SB27	一致	側柱	2×2間	14.4	3.81	3.79	N-0°	3期	3段階①-1
	SB28	一致	側柱	4×3間	53.2	8.98	5.92	N-89°-西	3期	2段階
	SB29 (SB103)	一致	側柱	2×2間	14.2	3.85	3.68	N-1°-西	3期	-
		変更	**総柱**	**2×2間**	**14.2**	**3.85**	**3.68**	**N-1°-西**	**-**	**12c ～**
	SB30	未検討	側柱	3×2間	28.2	6.64	4.25	N-4°-西	1期	(記載なし)
	SB31	未検討	側柱	4×2間	31.2	7.42	4.21	N-9°-西	1期	(記載なし)
	SB32	未検討	側柱	3×2間	23.8	5.44	4.38	N-8°-西	2期	(記載なし)
	SB33	未検討	側柱	3×2間	30.0	6.22	4.83	N-4°-西	2期	(記載なし)
第4段階 ～12c中	SB35		側柱	3×3間	55.7	8.72	6.39	N-7°-西	1期	-
	SB36		側柱	5×3間	78.0	12.58	6.20	N-7°-西	1期	-
	SB37		側柱	4×2間	55.4	9.13	6.07	N-4°-西	1期	-
	SB38		側柱	4×3間	62.9	9.67	6.50	N-8°-東	1期	-
	SB35	**変更**	**側柱**	**3×1？間**	**17.4**	**6.20**	**2.80**	**N-82°-東**	**-**	**3段階①-3**
	SB36	**変更**	**側柱**	**7×2間**	**111.8**	**17.2**	**6.50**	**N-8°-西**	**-**	**3段階①-3**
	SB39	未検討	側柱	4×2間	23.8	5.43	4.38	N-25°-西	2期	(記載なし)
	SB40	一致？	側柱	3×2間	17.9	4.41	4.05	N-80°-東	1期	3段階①-2
	SB41		側柱	2×2間	12.1	3.64	3.32	N-5°-西	1期	-
	SB41	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**12.1**	**3.64**	**3.32**	**N-5°-西**	**-**	**3段階①-1**
	SB42		側柱	2×2間	30.3	5.50	5.50	N-6°-西	1期	-
	SB42	**変更**	**側柱**	**5×2間**	**54.5**	**9.90**	**5.50**	**N-5°-西**	**-**	**3段階①-2**
	SB43		側柱	3×3間	33.4	6.25	5.36	N-7°-西	1期	-
	SB43	**変更**	**側柱**	**6×2間**	**71.3**	**13.30**	**5.36**	**N-7°-西**	**-**	**3段階①-2**
	SB44		側柱	3×2間	33.6	6.97	4.82	N-8°-西	1期	-
	SB44	**変更**	**側柱**	**1～×2間**	**-**	**2.30 ～**	**4.82**	**N-8°-西**	**-**	**3段階①-2**
	SB45		側柱	3？×2間	約35	6.00	約5.80	N-6°-西	1期	-
	SB45	**変更**	**側柱**	**3～×2間**	**35 ～**	**6.00**	**約5.80**	**N-3°-西**	**-**	**3段階①-1**
	SB50	一致か	側柱	3×1間	24.5	5.94	4.13	N-11°-西	1期	3段階①-3

	遺構名	プラン区分	主柱構造	柱配置(軸×軸)	床面積(㎡)	桁行(m)	梁間(m)	主軸方位	柱1特徴	町時間
第4段階 ～12c中	SB46		側柱	4×3間	43.7	8.82	4.96	N-14°-西	2期前	-
	SB47		側柱	5×3間	55.2	10.71	5.15	N-15°-西	2期前	-
	SB48		側柱	3×2間	34.0	6.74	5.04	N-16°-西	2期前	-
	SB49		側柱	3×3間	27.8	5.34	5.21	N-17°-西	2期前	-
	SB47	**変更**	**側柱**	**5～×2？間**	**-**	**10.71**	**-**	**N-15°-西**	**-**	**3段階②**
	SB48	**変更**	**側柱**	**7？×2間**	**72.8**	**13.9**	**5.04**	**N-16°-西**	**-**	**3段階②**
	SB51	一致	側柱	3×2間	25.1	5.67	4.42	N-11°-西	1期	3段階①-3
	SB52	一致	側柱	3×2間	27.0	5.96	4.53	N-5°-西	1期	3段階①-2
	SB53	一致	側柱	2×2間	11.4	3.52	3.25	N-74°-東	2期	3段階①
	SB54	一致	側柱	2×2間	13.0	3.82	3.41	N-7°-東	1期	3段階②
	SB55	一致	側柱	3×2間	12.3	3.72	3.31	N-70°-東	2期	3段階①
	SB56		側柱	4×1間	16.8	5.29	3.17	N-75°-東	1期	-
	SB56	**変更**	**側柱**	**2×1間**	**8.6**	**2.70**	**3.17**	**N-74°-東**	**-**	**3段階②**
	SB57		側柱	2×2間	11.5	3.68	3.13	N-68°-東	2期	-
	SB57	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**11.5**	**3.68**	**3.13**	**N-68°-東**	**-**	**3段階②**
	SB58		側柱	2×2間	11.9	3.47	3.43	N-4°-西	古代～不明	-
	SB58	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**11.9**	**3.47**	**3.43**	**N-4°-西**	**-**	**3段階①-1**
	SB59	一致か	側柱	2×1間	13.8	3.84	3.60	N-70°-東	古代～不明	3段階②
	SB60		側柱	2×2間	12.2	3.55	3.43	N-88°-東	1期	-
	SB60	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**12.2**	**3.55**	**3.43**	**N-88°-東**	**-**	**3段階①-1**
	SB61	一致	側柱	2×1間	11.9	3.71	3.21	N-16°-西	2期	3段階①
	SB62	一致	側柱	1×2間	16.3	4.54	3.60	N-87°-東	3期	3段階①-2
	SB63	一致	側柱	1×2間	17.1	4.36	3.92	N-89°-東	3期	3段階①-1
第4～5段階 ～12c中	SB64		側柱	2×2間	32.1	6.14	5.23	N-69°-東	2期前	-
	SB65		側柱	3×3-2間	36.4	6.30	5.78	N-15°-西	2期前	-
	SB66		側柱	3×2間	43.5	7.81	5.57	N-18°-西	1期	-
	SB65	**変更**	**側柱**	**6×2間**	**80.6**	**13.90**	**5.80**	**N-17°-西**	**-**	**3段階②**
	SB67	一致	側柱	3×2間	19.0	5.00	3.79	N-15°-西	1期	3段階①
	SB68	一致	側柱	2×2間	13.6	3.96	3.43	N-82°-東	1期	3段階①-3
	SB69	(なし)	側柱？	2×2間	19.4	4.41	4.39	N-16°-西	1期	(記載なし)
	SB70	(なし)	側柱？	2×1間	21.4	4.66	4.26	N-15°-西	2期	(記載なし)
	SB71	一致	側柱	4×2間	49.7	9.36	5.30	N-76°-東	2期前	3段階①
	SB72	一致か	側柱	3×2間	31.3	6.08	5.15	N-19°-西	2期前	3段階②
	SB73	(なし)	側柱	4×2間	38.6	7.49	5.15	N-16°-西	2期前	(記載なし)
	SB74	(なし)	側柱	2×1間	12.9	4.40	2.93	N-15°-西	2期前	(記載なし)
	SB75	(なし)	側柱	3×1間	20.4	5.15	3.96	N-22°-西	古代～不明	(記載なし)
	SB76	一致	側柱	3×1間	31.2	7.83	3.99	N-16°-西	2期	3段階①
	SB77	未検討	側柱	2×2間	30.1	5.63	5.34	N-5°-西	1期	(記載なし)
	SB78	一致	側柱	4×2間	26.5	7.09	3.74	N-23°-西	2期	-
	SB78	**変更**	**側柱**	**3×2間**	**19.4**	**5.20**	**3.74**	**N-23°-西**	**-**	**3段階②**
	SB79	一致	側柱	2×2間	13.2	3.67	3.61	N-13°-西	2期	-
	SB79	**変更**	**総柱**	**2×2間**	**13.2**	**3.67**	**3.61**	**N-13°-西**	**-**	**3段階②**
	SB80	一致	側柱	2×2間	17.7	4.60	3.85	N-13°-西	2期	3段階①
	(SB81)	(なし)	側柱	5×3間	60.5	10.32	6.64	N-73°-東	古代～不明	(記載なし)
	SB82	一致か	側柱	2×2間	19.1	4.67	4.08	N-18°-西	2期	3段階①
	SB101	**追加**	**側柱**	**3×2間**	**26.7**	**6.20**	**4.30**	**N-1°-東**	**-**	**12c ～**
	SB102	**追加**	**側柱**	**3×2間**	**27.5**	**6.40**	**4.30**	**N-84°-西**	**-**	**12c ～**
	SB104	**追加**	**側柱**	**1×1間**	**9.0**	**3.00**	**3.00**	**N-10°-東**	**-**	**12c ～**
	SB105	**追加**	**側柱**	**3×2間**	**30.6**	**6.00**	**5.10**	**N-10°-西**	**-**	**3段階①-3**
	SB106	**追加**	**側柱**	**2×1～間**	**-**	**3.30**	**-**	**N-73°-東**	**-**	**3段階②**
	SB107	**追加**	**側柱**	**2×1～間**	**-**	**3.60**	**-**	**N-15°-西**	**-**	**3段階②**
	SB108	**追加**	**側柱**	**2×？間**	**-**	**3.60**	**-**	**N-2°-西**	**-**	**3段階①-3**
	SB109	**追加**	**側柱**	**2×？間**	**-**	**3.30**	**-**	**N-1°-西**	**-**	**3段階②**
	SB001	5次	竪穴建物		10.7	3.35	3.2	N-25°-西	1期	3段階①-2
	SB501	5次	側柱	3～×2間	32 ～	6.15 ～	5.20	N-7°-西	3期	3段階②
	SB502	5次	側柱	3～×1間	30.5 ～	6.35 ～	4.80	N-1°-西	3期	2段階
	SB503	5次	側柱	1×1間	9.4	3.25	3.00	N-15°-西	2期前	3段階①-3
	SB504	5次	側柱	3×2間	17.9	4.70	3.80	N-15°-西	2期前	3段階①-3
	SB505	5次	側柱	1×1間	8.3	3.70	2.25	N-76°-東	1期前	3段階②
	SB506	5次	側柱	3×2間	17.6	4.90	3.60	N-14°-西	2期前	3段階①
	SB507	5次	側柱	1×1間	11.1	3.30	3.45	N-15°-西	1期前	3段階①
	SB508	5次	側柱	2×2間	19.0	5.00	3.80	N-17°-西	2期前	3段階①
	SB509	5次	側柱	2×1間	14.0	4.00	3.50	N-12°-西	2期前	3段階①
	SB510	5次	側柱	3×2～間	32.3 ～	8.30	4.50	N-12°-西	2期前	3段階①
	SB511	5次	側柱か	1～×2間	-	-	3.90	N-12°-西	2期前	3段階①

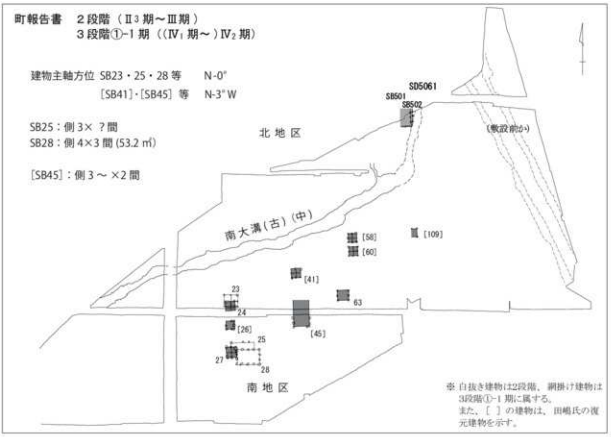


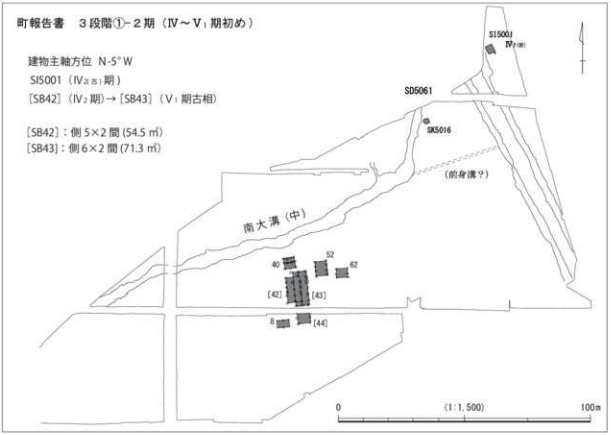
第6図　南大溝地区の県BP報告書Ⅰ変遷案1（S=1/1,500）



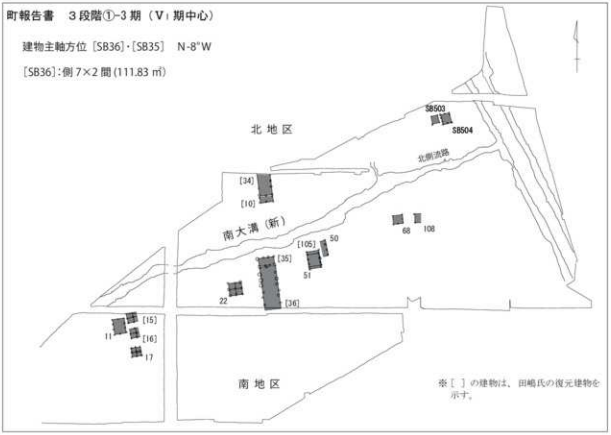


第7図　南大溝地区の県BP報告書Ⅰ変遷案2(S=1/1,500)





第8図　南大溝地区の町報告書変遷案1（S=1/1,500）



第9図　南大溝地区の町報告書変遷案2（S=1/1,500）

に細分されている。2期前半の主屋級の建物は、SB46～49建物群(Ⅴ期初頭)、次いでSB71と変遷し、南地区の建物中心域が約20m東に移動する。規模は、短い期間に建て替えるSB46(側4×3間)が43.7㎡、SB47(側5×3間)が55.2㎡を、SB71(側4×2間)が49.7㎡を測り、南面するSB71は南地区の大きな転換を示唆するものとなる。2期後半の主屋級建物は、SB72・73(重複)から西遷し、SB64・65(併存)に移る。建物規模は、SB72(側3×2間、31.3㎡)、SB73(側4×2間、38.6㎡)、SB64(側2×2間、32.1㎡)、SB65(3×3・2間、36.4㎡)と、前期よりかなり縮小する。氏の案は、Ⅵ1期・Ⅵ2期の南地区における墨書土器を含む大量の土器出土状況に比して、建物規模がかなり貧弱な印象を受ける。また、第5次SB510(総柱倉庫)に象徴される道路遺構北東域での建物群の検出(県BP7次調査)から、南大溝地区の集落構造が大きく再編・移動した可能性を示唆するものとなる。浜崎3期は、官道としての道路遺構が廃絶するⅥ3期に設定され、建物主軸方位はN-0°前後を示す(第7図)。主屋級建物としてSB28(側4×3間、53.2㎡)をあて、南地区で自立的に立地する2つの建物グループを復元する。これまでの律令制下の集落とは全く異なる、名田経営をおこなう富裕百姓層の屋敷地への転換をみてとることが可能と考える一方、当期の南地区出土遺物が県縦断調査に比して少なく、Ⅵ3期の建物群展開には疑問を残す。

次に、田嶋氏は、南地区の掘立柱建物について、当センター内での加茂遺跡検討会での検討を踏まえ、浜崎氏とはかなり異なる建物復元、変遷案を提示する(第8・9図)。詳しくは氏の論考を参照されたいが、特に内部の機能差を反映した柱間寸法差を許容する主屋級建物の復元、また2×2間建物を総柱構造とする点で差異が大きい(第3表)。氏は、南大溝地区の推移を5段階(加茂1～5期)と整理、うち2段階(加茂2期)、3段階(加茂3期)が該当する。2段階(Ⅱ3期～Ⅲ期)は、正方位をもつSB25・28(SB28:側4×3間、53.2㎡)を主屋とする総柱倉庫を伴う建物グループをあてる。公的性格を示唆しつつ、以降の時期と建物構造・建物群構成とは異なる点を指摘する。また、3段階との間に空白期間の有無が課題としており、前述の南大溝(古)(中)の推移を考慮すれば、比較的短い一定の空白期間を想定すべきと考える。

3段階(Ⅳ～Ⅵ2期)は、①-1期、①-2期(2小期)、①-3期、②期(3小期)の7回の変遷案を提示し、浜崎3期(Ⅵ3期)には建物群は展開しないとする。また、②期の最終小期以外は、「無廂長舎の主屋級建物1棟+2棟一対の倉庫(総2×2間)+付属屋」からなる建物構成を標準に推移する。主屋級建物は、①-1期(Ⅳ2期以前)が〔SB45〕(3～×2間)、①-2期が〔SB42〕(側5×2間、54.5㎡。Ⅳ2期)→〔SB43〕(側6×2間、71.3㎡。Ⅴ1期古相)、①-3期が〔SB36〕(側7×2間、111.8㎡。Ⅴ1期中心)と推移する。続く②期は、Ⅴ2期～Ⅵ1期に〔SB48〕(7?×2間、72.8㎡。間仕切り)・〔SB47〕(5～×2?間)→〔SB65〕(側6×2間、80.6㎡。間仕切り。Ⅵ1期中心)→Ⅵ2期の〔SB71〕(側4×2間、49.7㎡)+〔SB72〕(側3×2間、31.3㎡)と変遷する。氏の変遷案では、3段階はおおむね桁行6間以上の長舎建物を中核とした建て替えを継承、南地区全体の一体的土地占有と安定的な継続性を示すものといえる。建物群構成の変化は、東遷して2棟で機能分担をおこなう非長舎建物〔SB71・72〕となる段階にみてとれ、浜崎氏のⅤ期より遅れることとなる。筆者は、両氏の案について総柱構造の倉庫復元を留保しつつ、大枠で田嶋氏の建物復元・変遷案を支持したいと考える。

5. 終わりに

以上、加茂遺跡南大溝地区の主要遺構について雑駁に記してきた。本遺跡の県・町の一連の調査は、多年度に及ぶため、遺構相互の関係や全体像を把握しにくい状況にあり、南大溝地区の集落構造・変遷に関しても、必ずしも再検討・評価が進んでいるとはいえない。発掘調査報告書という2次資料を基にした再検討に大きな限界をもつことを十分認識しつつも、本遺跡発掘調査に従事した一人

第４表　南大溝地区主要遺構変遷概念的試案

土器時期区分		Ⅱ3期	Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2(古)期	Ⅳ2(新)期	Ⅴ1期	Ⅴ2期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅵ3期	Ⅶ期
暦年代		700				800				900		
南大溝	南大溝	南大溝(古)	埋没	空白期？	南大溝(中)		一部埋立/流路付替	南大溝(新)			埋没	
	北側流路					（前身溝？）	新掘					
	南側流路									縮小・埋没		
道路遺構	路面			敷段不明	時期不明	旧側溝段階	路面幅縮小？	新側溝段階		盛土改修	埋没	道路機能維持
	東側溝											
	西側溝						南大溝(新)と基幹水路を兼ねる				埋没	
南区建物群	田嶋氏段階	2段階		空白期？	3段階①-1期	①-2期	①-3期	3段階②			建物域移動	
	主軸方位	N-0°			N-3° W → N-5° W→N-8° W			→ N-14～17° W				
	主屋級建物	[SB28]-[SB25]			[SB45]→[SB42] [SB43]→[SB36]→[SB47・48] →[SB65]→SB71・72							
耕作地(畠地)												畠地化

として、現時点での自分なりの整理を試みたつもりである。県BP8次調査等の隣接調査の正報告を待つ部分も多いが、浜崎氏に倣って現時点での整理結果を第４表に示した。本遺跡の今後の活発な検討や理解促進の一助になれば幸いである。末文ではあるが、今回、膨大な内容をもつ県BP1～4次調査を執筆された浜崎氏に大いに敬意を表したい。また、引用した調査成果について十分咀嚼できなかった部分が少なからずあると思われるが、本稿の主目的を鑑み御海容をお願いしたい。

註

(1) 本田秀生・浜崎悟司・山川史子2009『津幡町加茂遺跡Ⅰ』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

(2) 戸谷邦隆・中嶋徹郎他2009『加茂・加茂廃寺遺跡　詳細分布調査（第1～14調査区）発掘調査報告書』 津幡町教育委員会

(3) 戸谷邦隆・吉岡康暢・田嶋明人他2012『加茂・加茂廃寺遺跡　詳細分布調査（第1～21調査区）発掘調査報告書』 津幡町教育委員会

(4) 岩瀬由美・林大智・和田龍介他2018『津幡町加茂遺跡・加茂窯跡群』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

(5) 川畑　誠・和田龍介他2021『津幡町加茂遺跡Ⅱ』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

(6) 和田龍介他2021『津幡町加茂遺跡Ⅲ』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

(7) 執筆者である浜崎悟司氏に確認したところ、道路遺構の縮小をⅣ2(新)～Ⅴ1期（画期２）との理解であり、第１表の一部を改変した。

(8) 年代観は、田嶋明人氏の編年(田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編」 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会、同2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷」「加賀 横江荘遺跡」白山市・白山市教育委員会)を基に作表した。

(9) 県BP報告書Ⅰ第81図西側溝断面Lで旧溝・新溝が明示されている(第４図断面D)。県BP５次調査では、近接する位置で、旧溝とされた堆積層から多量のⅥ2期遺物が出土する。報告書Ⅰの事実誤認と考える。

(10) 註(1)文献および註(3)文献(田嶋明人「南大溝域の掘立柱建物」)。なお、第６～９図には、両氏の建物変遷案に加えて今回指摘した南大溝、道路遺構の変遷試案を併せて表示している。

八日市地方遺跡の無文土器系土器について

山崎頼人（小郡市埋蔵文化財調査センター）
林　大智（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

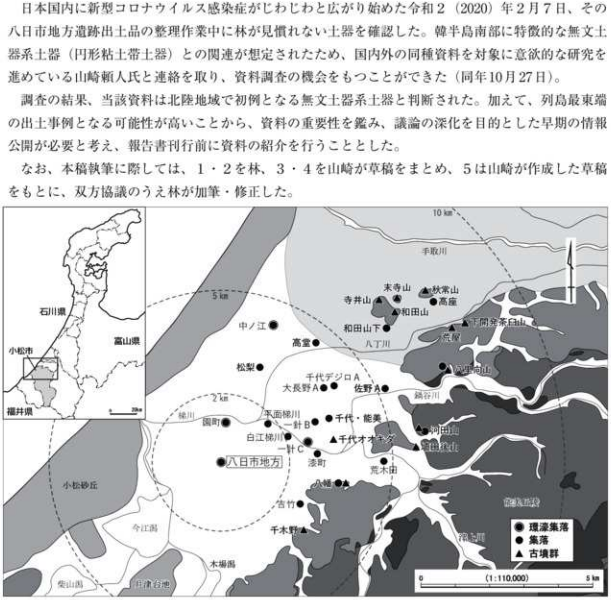
1．はじめに

「柄付き鉄製鉇（ヤリガンナ）」の衝撃的な発見（平成29（2017）年６月５日）から、はや３年半を超える年月が過ぎた。弥生時代中期における鉄器普及の認識に一石を投じる大きな発見となったこの「柄付き鉄製鉇」は、平成27～29（2015～2017）年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した北陸新幹線建設に係る小松市八日市地方遺跡の発掘調査で、ボックス型コンテナ1,500箱を超える膨大な遺物と共に出土した。これら多種多様の出土品や密集する遺構群からは、弥生時代中期における生業、モノづくり、精神性などの理解に寄与する豊富な情報を窺い知ることができ、現在、その調査成果を多くの人々に還元すべく、報告書の作成・刊行に向けた出土品整理作業を進めている。

日本国内に新型コロナウイルス感染症がじわじわと広がり始めた令和２（2020）年２月７日、その八日市地方遺跡出土品の整理作業中に林が見慣れない土器を確認した。韓半島南部に特徴的な無文土器系土器（円形粘土帯土器）との関連が想定されたため、国内外の同種資料を対象に意欲的な研究を進めている山崎頼人氏と連絡を取り、資料調査の機会をもつことができた（同年10月27日）。

調査の結果、当該資料は北陸地域で初例となる無文土器系土器と判断された。加えて、列島最東端の出土事例となる可能性が高いことから、資料の重要性を鑑み、議論の深化を目的とした早期の情報公開が必要と考え、報告書刊行前に資料の紹介を行うこととした。

なお、本稿執筆に際しては、１・２を林、３・４を山崎が草稿をまとめ、５は山崎が作成した草稿をもとに、双方協議のうえ林が加筆・修正した。



第１図　弥生・古墳時代における梯川流域の遺跡分布図（縮尺 1/110,000）（林 2012 を一部改変）

2．八日市地方遺跡および出土遺構の概要

八日市地方遺跡は、石川県小松市土居原町、日の出町、こまつの杜地内に所在し、ＪＲ小松駅東側一帯にひろがる弥生時代中期を主体とする大規模環濠集落で、遺跡の推定面積は18万㎡を超える。

遺跡は、梯川中・下流域に発達した平坦な沖積低地を分断するように形成された標高１～２ｍ程度の南北方向に細長い砂質堆積物からなる微高地の東縁部に立地しており、周辺は、梯川やその支流の合流地点にあたるとともに、干拓事業で消滅・縮小した潟湖（今江潟・柴山潟・木場潟）に囲まれた場所であることから、水運を介した水陸交通の結節点に位置する遺跡として捉えられる。

八日市地方遺跡は、これまで数多くの発掘調査が実施されており、なかでも、小松市教育委員会が平成５（1993）年度～平成12（2000）年度に行った小松駅東土地区画整理事業に係る発掘調査では、集落の中央を東西に貫く川（埋積浅谷）沿いに多重の環濠で囲まれた居住域が確認され、環濠の外側には方形周溝墓を主体とする広大な墓域の存在が明らかとなった。居住域には平地建物、掘立柱建物、井戸、土坑などの施設が密集しており、川の肩部付近からは、複数の貝層（貝塚）や堅果類の貯蔵穴とともに、木製品の未成品や原材、玉作関連資料などが多数確認され、居住域に隣接した川肩部が、生業に係る多様な加工・処理および貯蔵、生産の場として利用されたことを窺えるなど、北陸随一の規模・内容を誇る弥生時代中期の大規模集落像がこのときに形作られた。

また、これらの調査で検出された遺構や川などからは、数十万点におよぶ膨大な量の出土品が発見され、そのうち1,020点は「北陸地方を代表する、弥生時代中期に盛行した拠点集落の出土品一括として、極めて重要である」ことから、平成23年６月に国の重要文化財に指定されている。

一方、石川県では、平成27～29年度の３ヶ年にわたり、遺跡の西端を南北に縦断して建設される北陸新幹線小松駅舎および路線敷設部分対象の発掘調査（延べ9,730㎡）を実施した。なお、調査区のうちＡ・Ｂ・Ｃ区は、川の右岸域（北側）にあたる（第３図）。

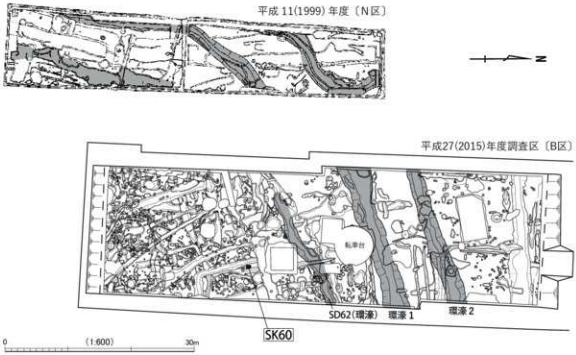
発掘調査の結果、Ｂ区とＣ区北側では、掘立柱建物、平地建物、土坑などが足の踏み場のないほど密集する居住域を確認し、Ｂ区中央では、平成11（1999）年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に係る発掘調査（Ｎ区）につながり、居住域北縁部を取り囲む３条の環濠を検出した（第２図）。居住域の時期は、弥生時代中期前葉～中葉〔八日市地方５～８期（福海・宮田・橋本2003）〕を主体とする。

遺跡の南北両端にあたるＡ・Ｄ区では、ほぼ全域に方形周溝墓を主体とする広大な墓域が認められ、Ｂ区北側の環濠間には、環濠掘削土を利用した複数の方形周溝墓を検出した。発掘調査で確認できた30基を超える方形周溝墓のなかには、墳丘の長辺が４ｍ程度の小型墓から15ｍを超える大型墓までさまざまな規模のものが混在しており、周溝の四隅が途切れるものを主体としている。

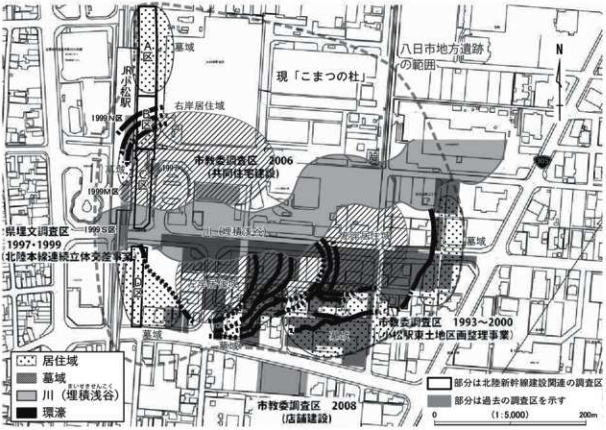
さらに、Ｃ区南端では川（埋積浅谷）を検出し、川肩部から川底に向かう緩傾斜地には、玉砂利が敷かれた石敷き遺構、堅果類の貯蔵穴が設置され、緩傾斜地の落ち際には、ヤマトシジミやイワガキを主体とした小規模な貝塚、貯木施設、人為的に剥かれ砕片化した堅果類種皮の集積が認められた。

また、川の堆積層からは、膨大な量の土器、石器、木製品や、碧玉・ヒスイを素材とした玉作関連資料などとともに、「柄付き鉄製鉋」、鋳造鉄斧片と鋳造鉄斧柄、小型青銅器、ヒスイ製垂飾と碧玉製管玉を連ねた装身具、鹿角製アワビオコシなどの稀少な資料も多く出土した。

本稿で詳述する無文土器系土器（第４図）は、Ｂ区南側の居住域内に位置するC29グリッドSK60と同グリッド包含層から出土した。SK60は長さ61㎝以上、幅79㎝、深さ19㎝を測る土坑で、東側をを溝（SD21）に切り込まれる。覆土中には、当該資料と少量の土器片が共伴しており、時期は八日市地方７期を下限とし、それよりやや古相（６期前後）の土器も含まれている。



第２図　B区（平成 27 年度調査）、N区（平成 11 年度調査）遺構概略図（縮尺：1/600）



第３図　調査区の位置と遺跡概要図（縮尺：1/5,000）

3．資料の観察所見

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが2015年度に実施した発掘調査で、無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）が２点出土した[注1]。この２点は口縁部の小破片資料であるため判断が難しいが、胎土やつくりから別個体と考えた。

【B区C29グリッド　包含層出土資料】（第４図１、写真１上段）

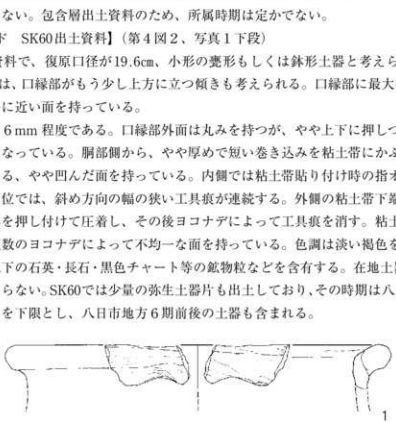
口縁部の破片資料で、復原口径が20.4cm、胴部上位にやや膨らみを持つ小形の甕形土器と考えられる。若干歪みを持ち、部分的には、口縁部がもう少し水平となる傾きも考えられる。

胴部の器壁厚は８mm 程度でやや厚い。比較的円形を維持した粘土帯口縁が観察できる。胴部側から短い巻き込みによって粘土帯にかぶせて貼り付けており、その痕跡が所々に段差として確認できる。粘土帯上面、側面を数単位でナデでおり、複数の面が形成されている。内側ではヨコナデの後に斜め方向の工具のアタリが確認できる。粘土帯下端部分は広いヨコナデで圧着されている。少量の粘土を下端部分に充填し、横ナデによって引き延ばされた痕跡がみられる。色調は淡い褐色を呈し、胎土は素質が粗く、２mm以下の石英・長石・赤色粒等の鉱物粒などを含有する。在地土器と比べて胎土・色調は大きく異ならない。包含層出土資料のため、所属時期は定かでない。

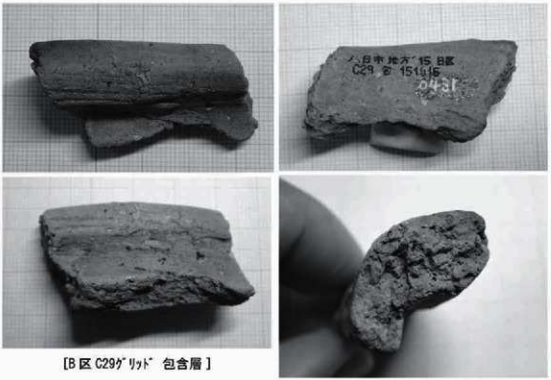
【B区C29グリッド　SK60出土資料】（第４図２、写真１下段）

口縁部の破片資料で、復原口径が19.6cm、小形の甕形もしくは鉢形土器と考えられる。若干歪みを持ち、部分的には、口縁部がもう少し上方に立つ傾きも考えられる。口縁部に最大径を持つ器形で、口縁部上端は水平に近い面を持っている。

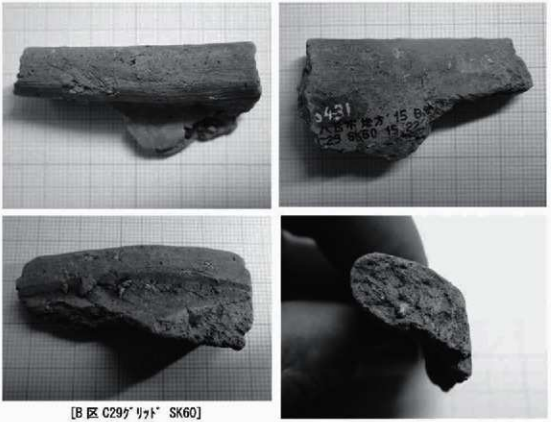
胴部の器壁厚は６mm 程度である。口縁部外面は丸みを持つが、やや上下に押しつぶされて扁平化した粘土帯口縁となっている。胴部側から、やや厚めで短い巻き込みを粘土帯にかぶせて丁寧なナデを施し、それによる、やや凹んだ面を持っている。内側では粘土帯貼り付け時の指オサエとヨコナデがみられ、やや下位では、斜め方向の幅の狭い工具痕が連続する。外側の粘土帯下端部分は内面と同様の幅の狭い工具を押し付けて圧着し、その後ヨコナデによって工具痕を消す。粘土帯部分は上面から側面にかけて複数のヨコナデによって不均一な面を持っている。色調は淡い褐色を呈し、胎土は素質が粗く、２mm以下の石英・長石・黒色チャート等の鉱物粒などを含有する。在地土器と比べて胎土・色調は大きく異ならない。SK60では少量の弥生土器片も出土しており、その時期は八日市地方７期（弥生時代中期中葉）を下限とし、八日市地方６期前後の土器も含まれる。



第４図　八日市地方遺跡出土無文土器系土器〔縮尺1/2〕

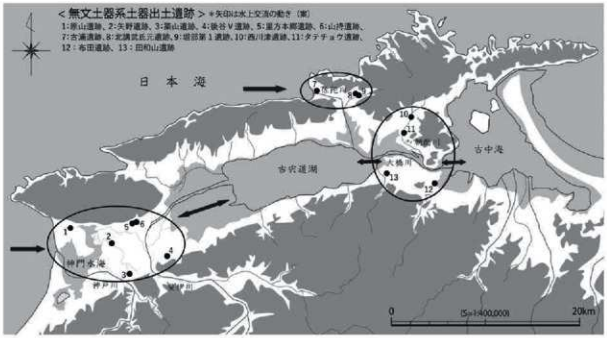


[B 区 C29ｸﾞﾘｯﾄﾞ 包含層]



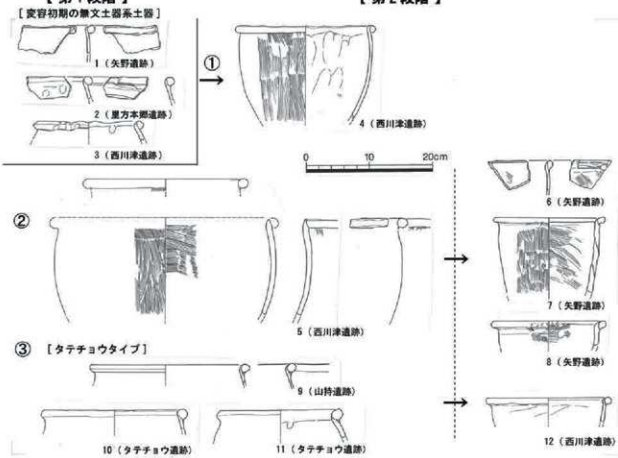
[B 区 C29ｸﾞﾘｯﾄﾞ SK60]

写真１　八日市地方遺跡出土無文土器系土器



＜無文土器系土器の変容過程＞

【第１段階】　　【第２段階】



第５図　出雲地域における無文土器系土器（山崎・原田・岩本2021を改変）

４．資料の位置づけ

本資料はこれまでに確認されている無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）の東限を示す。日本海域で無文土器系土器資料の比較的まとまっている山陰、出雲地域の様相と比較して、八日市地方遺跡

資料の位置づけを検討する。

山陰ではこれまでに50例弱の無文土器系土器（円形粘土帯土器）が確認されている（山崎・岩本・原田2021）。無文土器そのものはなく、変容初期段階のものが流入し、その後、変容が進む（第5図）。無文土器系土器は包含層や自然河道出土のものが多く、出雲第Ⅰ―2・3様式（松本1992）（弥生時代前期後半）以降、少量の「変容初期の無文土器系土器」と変容が進行した無文土器系土器が多く出土するようになる。

甕もしくは鉢の口縁部資料が多く、胴部側からの擬口縁巻き込みによる粘土帯貼り付けを基本として以下の特徴で分類した（山崎・岩本・原田2021）。

①粘土帯土器特有のつくりで、粘土帯下端をそのまま残すもの（もしくは形状が大きく変わらない程度のナデがあるもの）。

②粘土帯と擬口縁の接合の際に、粘土帯下端をハケ工具やナデによって押し伸ばすもの。

③粘土帯と擬口縁の接合の際に、粘土帯下端と胴部の間に粘土を貼り足して埋めるもの。

特に、③のうち、円形粘土帯をよく残し、粘土帯と貼り足した粘土の間に空隙を持つ例があり、「タテチョウタイプ」とする。

それらの変遷については、以下のように想定できる。

【第1段階】無文土器系土器でも、円形粘土帯土器の口縁部特徴を遺す（口縁部資料のみで、底部については不明）。粘土帯の上端は強いヨコナデによって平坦面を持つものが多く、下端については弱いヨコナデ、もしくはそのままであるもの。里方本郷遺跡例（第5図1）、矢野遺跡例（第5図2）、西川津遺跡例（第5図3）が該当する。いずれも胴部から口縁部にかけてやや内傾する器形である。

【第2段階】無文土器系土器で変容が進むもの。粘土帯の貼付けは胴部・擬口縁からの巻き込みが確認できる。粘土帯と擬口縁の接合を強くするために粘土帯下端をハケ工具やナデによって押し伸ばすもの（②：第5図5～8）や粘土帯下端と胴部の間に粘土を貼り足して埋めるもの（③：第5図9～12）がみられる。②は下端部分の狭い範囲の圧着では断面円形を残し、その押さえ・ナデつけによって円形粘土帯の断面が変形し、下に向けて小さく突出する特徴がある。断面全体が変形するくらいの強い（広い）圧着の場合は断面方形状に変化する。③も同様に断面円形を良く遺す。下端に胴部と粘土帯の圧着用の粘土を付け足してヨコナデによって粘土帯下端の貼り付け痕跡を消すものがあり、接合部にわずかな空隙が遺るものも存在する。特に、この種の特徴を持つ「タテチョウタイプ」は、断面円形から長円形・長楕円形へと変化する動きもみられる。

ちなみに、北部九州での変容は粘土帯下端をそのままにしているもの（①）と城ノ越式土器との影響関係から断面円形を失ったもの（②③の変容が進んだもの）がみられる。断面円形を残した形で、下端を処理する土器が山陰には多い傾向がみられる。

八日市地方遺跡の2例は②（圧着）と③（充填）のタイプがみられる。第4図1は、粘土帯下端に貼り付け粘土を充填して下端を処理している。粘土帯は比較的円形を残しているものの、ナデによって上部はしっかりした面を持っている。第4図2は、粘土帯下端に工具痕が確認でき、粘土帯下端部分のみを押して圧着し、その後ヨコナデで整えている。側面は丸みを残しているが、粘土帯上部と下部はナデによって面を持っている。八日市地方遺跡例は、出雲地域の西川津遺跡やタテチョウ遺跡例ほど断面円形を残していない印象を持つ。

以上のことから、出雲地域・変容第2段階に相当することが言える。

ここで問題となるのが、日本海地域における無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）の所属時期である。北部九州では、板付Ⅱ式から城ノ越式を中心とした時期に無文土器、無文土器系土器がみられ、

山陰では出雲第Ⅰ―2・3様式（弥生時代前期後半）以降に無文土器系土器がみられる。八日市地方遺跡の2例は八日市地方7期（弥生時代中期中葉）を下限とする時期で、やや開きがある。それぞれの所属時期の検討、無文土器系土器を軸とした各地域の併行関係の検討は今後の課題である。

5．課題と展望

今回報告する資料の発見を契機に、これまでに報告された資料を見直すと、八日市地方遺跡では他の調査地点でも無文土器系土器が出土している[註2]。さらには、八日市地方遺跡だけでなく周辺の遺跡でも無文土器系土器が出土する可能性が十分考えられる。特に、日本海沿岸の天然の良港である潟湖周辺に立地し、港津と考えられる集落はその候補になるであろう。

北陸地域における無文土器系土器の出土は、無文土器系土器とその文化を携えた集団が日本海ルートで往来し、交流を持つことを示すが、今後、弥生土器との共伴時期や無文土器系土器とどのような遺物や遺構がセットで北陸地域へ伝播するのかが重要である。層灰岩製扁平片刃石斧の分布（佐藤・宮田2018）や金属器（片）の流通（吉田2010・2013、山崎2015）、そして、玉つくりとその流通からうかがえる地域間交流（河村2018）とも関連することが窺える。韓半島金属器文化の到来は中期以降に顕著となる集落の拡大や拠点集落の形成（安2009）にも影響を及ぼしているだろう。

ここで北陸地域における鉄器導入期（弥生時代中期）の様相を概観すると、八日市地方遺跡では、弥生時代中期中葉古段階（八日市地方6・7期）に柄付き鉄製鉇（写真2）や鋳造鉄斧片、鋳造鉄斧や鉄ノミの木製柄（第6図）、木材に遣された鉄製工具による加工痕がみられることから、この時期を明確な鉄器導入期と把握できる。続く中期後葉には、八日市地方遺跡で鋳造鉄斧柄の出土量が増加し、装着を推測できる鉄斧のバリエーションが豊富になるとともに、木材に残された鉄製工具による加工痕も増加する（下濱編2016）。また、他遺跡では、小地域の中核的集落や流通の拠点となる集落で鉄器が偏在的に出土する傾向を窺え（林2017）、前時期より鉄器普及が進行したことを示す。

これら鉄器の大半は、韓半島から日本海沿岸域を介して北陸地域にもたらされたものと考えられ、質・量ともに突出する八日市地方遺跡は、陸海交通の便に恵まれ、貴重な碧玉・ヒスイを多量に取り扱う、日本海沿岸域の東西をつなぐ交易の拠点的集落として機能していた可能性が高い。

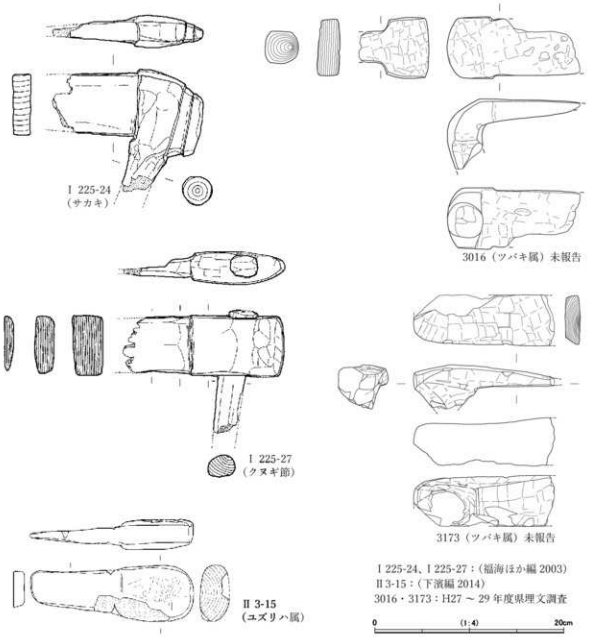
これを裏付けるように、鉄器導入期である弥生時代中期中葉の八日市地方遺跡からは、韓半島南部や北部九州地域と共通する質量体系の石製円筒権（天秤権、写真3）が出土しており（武末2020）、これらの地域間で共通する基準や計量技術に基づく継続的な交易が行われた可能性を示唆する。

さらに、八日市地方遺跡の出土品整理が進められた結果、弥生時代中期前葉まで遡る可能性の高い鋳造鉄器片や、鉄製工具による加工痕を遺す木材が散見され始めた。これらの鉄器関連資料こそが、無文土器系土器とその文化を携えた集団の交流を示すものと推測され、今後の整理作業により、この環日本海を介したダイナミックな交流の実態、その交流を背景とした集落構造および各種手工業生産の変遷などに迫り得る資料を積み重ねていきたい。

本資料はこれまで確認された無文土器系土器の東限を示す。本資料の紹介が、既報告資料の再発掘へつながることを希望し、広く日本海を通じた韓半島金属器文化の拡散が検討される機運となることを期待する。

謝　辞

本稿をまとめるに際しては、下濱貴子、武末純一、中屋克彦、村上恭通からご教示・ご協力をいただいた（五十音順、敬称略）。文末ながら記して感謝申し上げます。



第６図　八日市地方遺跡出土の鋳造鉄斧柄〔縮尺１/４〕（弥生時代中期中葉～後葉）

写真２　柄付き鉄製鉈

写真３　八日市地方遺跡の石製円筒権

（註１）本稿における無文土器、無文土器系土器の定義については山崎2020に拠る。これまで「擬朝鮮系無文土器」、「擬無文土器」という語が用いられてきたが、字義に照らし合わせれば、李昌熙の言うように擬○○土器は、○○土器を対象に模倣した土器である（李2009）。現在、日本で使われている『「擬」無文土器』は無文土器人が弥生土器の影響を受けて作った土器を主に指しており（後藤1979・1987、片岡1990）、日本での「擬」と韓国での「擬（類似）」を用いた語は混乱を生じているため、以下のように整理した。

日本では無文土器（水石里式土器・勒島式土器等）と無文土器系土器（変容無文土器・変容弥生土器（・影響を受けた可能性のある土器））があり、韓国では弥生土器（板付式土器・城ノ越式土器・須玖式土器等）と弥生系土器（変容弥生土器・変容無文土器（・影響を受けた可能性のある土器））が存在する。

（註２）小松市教育委員会の既報告資料。資料調査では下濱貴子氏のお世話になった。北陸における無文土器系土器の評価は別稿を準備中である。

【参考文献】

片岡宏二1990「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代日本と朝鮮』名著出版

河村好光2018「日本列島における弥生時代」『考古学研究』65-3

後藤直1979「朝鮮系無文土器」「三上次男博士領寿記念東洋史・考古学論集」記念論集編集委員会

後藤直1987「朝鮮系無文土器再論－後期無文土器系について－」「東アジアの考古と歴史　中」　岡崎敬先生退官記念論集　同朋舎出版

佐藤由紀男・宮田明2018「石川県八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』65-3

下濱貴子（編）2014『八日市地方遺跡Ⅱ 第４部 木器編』小松市教育委員会

下濱貴子（編）2016『八日市地方遺跡Ⅱ 第７部 補遺編』小松市教育委員会

武末純一2006「韓国の鋳造梯形鉄斧－原三国時代以前を中心に－」「七隈史学」第７号 七隈史学会

武末純一2020「日韓の権」「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書 論考編）」新・日韓交渉の考古学－初期鉄器～原三国時代・弥生時代－研究会

中尾智行2018「弥生時代の計量技術」『考古学研究』第65巻第２号 考古学研究会

中屋克彦（編）2019『小松市 八日市地方遺跡』石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター

林大智2017「北陸における農工具の鉄器化について」「木製品からみた鉄器化の諸問題」シンポジウム記録10 考古学研究会

林大智2018「石川県小松市 八日市地方遺跡」『月刊考古学ジャーナル』№714　ニューサイエンス社

林大智2019「木工具から読み解く木製品生産の動態」『古代学研究』222　古代学研究会

福海貴子・宮田明・橋本正博（編）2003「八日市地方遺跡Ⅰ（第１分冊 本文・写真図版編）」小松市教育委員会

松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」「弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編」木耳社

安英樹2009「北陸における弥生時代中期・後期の集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集

山崎頼人2015「日韓青銅斧の研究－三沢北中尾遺跡出土銅斧片の意義－」「古文化談叢」第74集

山崎頼人2020「無文土器から見た環有明海の日韓交流」「環有明海の弥生文化Ⅰ（弥生時代の集落）」吉野ケ里遺跡－軌跡と未来開催記念セミナー　佐賀県立博物館・美術館

山崎頼人・岩本真美・原田敏照2021「山陰における無文土器系土器－出雲地域を中心として－」「山陰弥生文化の形成過程」島根県古代文化センター研究論集第25集

吉田広2010「弥生時代小型青銅利器論－山口県井ノ山遺跡出土青銅器から」「山口考古」第30号

吉田広2013「武器型青銅器の伝播と時期」「弥生時代政治社会構造論」柳田康雄古稀記念論文集　雄山閣

李昌熙2009「在来人と渡来人」「弥生文化誕生」弥生時代の考古学２　同成社

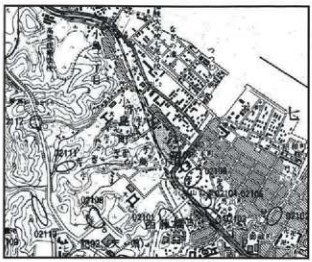
小島西遺跡出土の鳥類遺体について

江田真毅（北海道大学総合博物館）・山川史子

はじめに

石川県七尾市小島西遺跡は能登半島の七尾湾岸にあり、小丘陵に背後を囲まれた谷内から谷口にかけての平野部に位置する。埋め立てにより遺跡は現海岸線から500mほど離れているが、貝層出土の貝類の分析から、縄文時代後晩期には海であったことがわかっている。その後、谷奥からの土砂の流入などもあり、古代以降においては遺跡に近接して汀線が位置していたものと推定される。

同地は縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世と断続的に長期間にわたり利用された場所であるが、特に8世紀～9世紀にかけて大量の木製祭祀具を使った律令的祭祀が行われていた点が注目される。斎串や人形などの木製祭祀具は大型品が多いことが特徴である。また、イノシシ頭蓋骨が同一層から出土し、多量に出土したモモと共に祭祀に利用されたものと考えられている。木製祭祀具を使用した祭祀は、古代から中世初頭にかけて長期にわたって執り行われており、その規模や継続性から、能登国府あるいは香嶋津に付随する祭祀場であったと推定されている。中世（16世紀）～近世にかけては集落が継続して存在し、建物や井戸、土坑の他、道路も確認されている。廃棄土坑や井戸跡から当時の食生活をしのばせる魚骨類や種実類が出土した。



遺跡の位置（S=1/25,000）

発掘調査は平成14（2002）年、15（2003）年、16（2004）年と3ヶ年にわたって実施され、平成20（2008）年3月に発掘調査報告書が刊行された。動物遺存体については、パリノ・サーヴェイ株式会社が同定、分析を行っている。その結果、古代の遺構から、イワシ類・スズキ類・タイ類などの魚類、鳥類、アシカ・イヌ・イノシシ・ニホンジカ・ニホンカモシカ・ウマ・ウシなどの哺乳類が出土した。中世～近世とされる遺構からは上記の種類以外にニホンザルやイルカも出土したが、古代ほどの出土量はない。鳥類の可能性があるものについては6点報告されているが、うち1点は魚骨とみられ、今回5点の鳥類を対象に再検討を行った。

資料と方法

資料はすべて発掘調査中に視認され、ピックアップ採取されたものである。資料の帰属年代は、古墳時代～中世が1点、奈良～平安時代（8～9世紀）が1点、平安時代（11～12世紀）が2点、近世以降（16世紀末～）が1点である。資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、江田(EP)の所蔵標本を利用した。骨の部位の名称はBaumel et al(1993)および日本獣医解剖学会(1998)に、分類群名は基本的に日本鳥学会（2012）に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分

類は Winker et al.（2015）に従った。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、産卵前後のみ雌鳥の骨中に二次的に形成される骨髄骨の有無、解体痕と加工痕を記載した。

結果

分析対象とした5点中3点で科以下を単位とした同定ができた（表）。確認された分類群はガン族、アビ科、アホウドリ科である。ガン族と同定した資料（標本番号317）は近世に比定される溝から出土したものである。現生標本のマガン（EP-25）より少し小さい右足根中足骨の近位端であった。一方、アビ科と同定した資料（標本番号318）はアビ（EP-82）とほぼ同大の右脛足根骨、アホウドリ科と同定した資料（標本番号374）はアホウドリ（EP-97）よりかなり小さく、コアホウドリ（EP-130）とほぼ同大の右大腿骨骨体部であった。ともに平安時代に比定される包含層から出土した資料である。他の2点については破損のため鳥綱以下の単位での同定はできなかった。いずれの資料にも骨髄骨は含まれておらず、アビ科の脛足根骨が鞘上橋の形成が完了していない若鳥のものであったのを除き、他の資料は骨幹の平滑な成鳥のものであった。また、ガン族の資料は全体が火を受けていた一方、いずれの資料でも解体痕や加工痕は認められなかった。

考察

今回の小島西遺跡出土の鳥類骨の再検討では、平安時代の包含層からアビ科とアホウドリ科、近世以降に比定される溝からガン族が確認された。アビ科はその大きさからアビの可能性が高い資料である。アビ科の鳥は石川県には冬季に訪れる（日本鳥学会2012）ことから、冬季に狩猟されたものと考えられる。一方、アホウドリ科はアホウドリの現生標本よりかなり小さく、コアホウドリあるいはクロアシアホウドリの可能性が考えられるものであった。現在、アホウドリ科の鳥はいずれの種も日本海の本州中部周辺に分布していない（日本鳥学会2012）ものの、石川県下の遺跡では他に高田遺跡（石川県羽咋郡志賀町富来高田地内・古墳時代）から報告されている（富来町教育委員会 1999）。また、近県では管見の限り、富山県の小竹貝塚（富山市五福・縄文時代前期：富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014、納屋内・松岡2017）、大境洞窟遺跡（氷見市大境字駒首・縄文時代中期～晩期：氷見高等学校歴史クラブ1964）、境A遺跡（下新川郡朝日町境・縄文時代中期～晩期：橋本1992）、および新潟県の浜端洞穴（佐渡郡相川町大字高瀬・古墳時代：相川町教育委員会1969）でも報告がある。各遺跡から出土するアホウドリ科の骨はそれほど多くないことから、北海道北部や東部のように周辺海域に多数のアホウドリ科の鳥が生息し、頻繁に狩猟の対象となっていたと考えられる（Eda and Higuchi 2005）のとは様相が異なることも含め、生物地理学的な観点からも興味深い資料と言える。

近世に比定される溝から出土したガン族の資料は、マガンのほか、ハクガンやサカツラガンなどの可能性が考えられた。ガン族の骨は金沢城下町遺跡・丸の内7番地点からも検出されている（江田・山川2020）ほか、江戸の加賀藩藩邸であった本郷遺跡を含む江戸時代の遺跡からも頻繁に出土している（新美2008、江田2017）。当時の七尾においても同様に利用されていたことが窺える。加賀の元禄期の農作業の様子を描いた『農業図絵』（土屋1983）[21]には、刈った稲束をあちこちに分散して干している情景の中にガンのような鳥が三羽いる場面がある。稲刈り後の時期にはガンが身近に飛来することが、当時は加賀のみならず、能登でも見られた風景と思われる。近世の人々にとっては身近な鳥の代表的なものだったのだろう。

註）もっとも原本に近い写本といわれる、石川県在住の櫻井氏所蔵のものが使用されており、原本の情報がかなり忠実に伝えられているとされる。

引用・参考文献

相川町教育委員会 1969『佐渡浜端・夫婦岩洞穴遺跡の調査』相川郷土博物館報6: 1-36

江田真毅 2017「加賀藩前田家本郷邸内における鳥類利用の時間的・空間的変遷―溶姫御殿に着目して―」『江戸藩邸と国元・金沢の近世食文化―動物考古学の研究成果から―』東京大学理蔵文化財調査室編、東京大学理蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会、45-52

江田真毅・山川史子 2020「金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）出土の鳥類遺体について」石川県埋蔵文化財情報42: 33-35

（財）石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2008『七尾市 小島西遺跡』

土屋又三郎 1983『農業図絵』農山漁村文化協会

富来町教育委員会 1999『高田遺跡』富来町教育委員会

（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告60：小竹貝塚発掘調査報告10』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

納屋内高史・松岡廣繁 2017「小竹貝塚出土の鳥類遺存体（予報）」富山市考古資料館紀要36: 17-27

新美倫子 2008『鳥と日本人』西本豊弘編『人と動物の日本史Ⅰ　動物の考古学』吉川弘文館、226-252

日本獣医解剖学会 1998『家禽解剖学用語』日本中央競馬会、東京

日本鳥学会 2012『日本鳥類目録改訂 第7版』日本鳥学会、三田

橋本正春編 1992『北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町編7　境A遺跡総括編』富山県教育委員会

氷見高等学校歴史クラブ 1964「大境洞窟遺跡」富山県氷見高等学校歴史クラブ編『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』富山県氷見高等学校歴史クラブ　20-22

Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., Berge, J.C.V. 1993. *Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium*. Cambridge:Nuttall Ornithological Club.

Eda, M., Higuchi, H. 2004. Distribution of albatross remains in the Far East regions during the Holocene, based on zooarchaeological remains. Zoological Science 21: 771-783. DOI: 10.2108/zsj.21.771

Winkler, D. W., Billerman, S. M., & Lovette, I. J. 2015. *Bird Families of the World*. Barcelona: Lynx Edicions.

標本番号	報告書同定	出土地点	層位他	時代	小分類	部位	左右	部分	大きさの記載	備考
97	鳥類不明	D2区　G9b	下層3層	8～9世紀	同定不能	四肢骨		骨体部破片		
317	アホウドリ	C区 SD51b		近世（16世紀末～）	ガン族	足根中足骨	右	近位端	マガン（EP-25）より少し小さい	火を受けて白色化
374	コアホウドリ	H区	下層 030929 No.8（骨）	11～12世紀	アホウドリ科	大腿骨	右	骨体部	コアホウドリ（EP-130）とほぼ同大	
381	カイツブリ	H区	下層 2ya 層 031007	11～12世紀	アビ科	脛足根骨	右	骨体部～遠位端	アビ（EP-82）とほぼ同大	鍵上橋の形成不完全
453	鳥類不明	G2区　SK19・20	崩落土	古墳～中世	同定不能	四肢骨		骨体部破片		

表　小島西遺跡出土の鳥類

標本番号 317

標本番号 374

標本番号 318

図　小島西遺跡出土の鳥類骨

石川県埋蔵文化財情報
第44号

発行日　2021（令和3）年3月29日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731
URL　http://www.ishikawa-maibun.jp
E-mail address　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　㈱ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター